

# Graded Direct Method Association of Japan

# No. 58 News Bulletin

2006年6月

発行：GDM英語教授法研究会 編集：片桐ユズル

東日本支部 〒246-0037 横浜市瀬谷区橋戸3-48-12 安西聖雄方 Tel/Fax: 045-301-4062

西日本支部 〒567-8578 茨木市宿久庄2-19-5 梅花女子大学短大学部 英語コミュニケーション学科 此枝洋子研究室内 Tel:0726-43-6221

<http://www.gdm.pos.to>

## 教師教育の視点からGDM英語教授法を考える

深田 桃代

### 0. はじめに

外国語を教える専門家として、英語教師が身に着けなければならない能力、資質とは何であろうか。英語教師の養成や、英語教師の力量向上のための様々な研修プログラムは、より優れた実践を可能にする教師の成長に、どのように役立っているのだろうか。

どんな職業についても、現場で10年も誠意をこめて仕事に励み、向上心を持って体験から学ぶ姿勢を怠らなければ、その道での仕事遂行能力はそれなりに進歩しているはずである。

私事で恐縮であるが、筆者は英語教師になって20年を越え、すでに職業としてその仕事を

全うするまでに、残り時間をかぞえる年になっても、自らの授業実践が着実に進歩しているとはとうてい思えない。筆者が英語教師という自らの職業に抱き続けてきた疑問と不満は、まさにこの点にあったが、最近になってGDMという教授法に出会い、ようやく解決の糸口を見出そうとしている。

英語教育の分野で、1つの教授法を学ぶことが、評価されない時代になって久しい。そうした時代に英語教師となった筆者の個人的な体験と思いを語ることで、GDM教授法とこの研究会の価値を再考してみたい。

### 特集：GDMの実践

教師教育の視点からGDM英語教授法を考える	深田 桃代	1
現場の教師から見た新学習指導要領	中山 滋樹	4
GDMを取り入れた授業実践—時制の感覚の定着を目指して—	松浦 克己	9
高齢者の市場を開拓しよう	新井 等	14
小学生英語教師養成プログラム：GDMによる授業実習	松川 和子	16
短大2年次生への読解ワークシートによる授業	此枝 洋子	21
*		
Basic English 再再評価	相沢 佳子	29
ETPの構造とBasic Englishの記号体系	後藤 寛	30
"Computers" are changing our everyday living	Asada Akie	36
書評 <i>Empires of the Mind: I.A.Richards and Basic English in China</i>	飯嶋 良太	37
二つのGDMワーク	加藤 准子	39
English Through Television (ETV)の利用を考える	黒瀬 るみ	40
活動報告		41

## 1. 英語教育の世界へ：CLTとの出会い（1980年代）

1982年、短大で助手をしていた筆者は、様々な偶然と幸運が重なって、ブリティッシュ・カウンシルと文部省の後援による大学英語教員のための短期（10週間）研修派遣プログラム（英国レディング大学）に参加する機会に恵まれたことで、英語教育の世界に足を踏み入れることになった。この研修で1970年代からヨーロッパを中心に台頭し始めた“Communicative Language Teaching”（CLTと略称）という教授法の洗礼を受けることになった。それまでの正しい言語形式の習得をめざす教授法が、実際の場面で言語をコミュニケーションの手段として使える人材を養成していないという批判から生まれたこの教授法は、日本の英語教育にもかなり影響を与え、中高の検定教科書にも、教室内でのコミュニケーション活動が盛り込まれるようになった。当時、言語知識としての英語力のある程度備えた大学生対象のわずかな授業体験しかなかった筆者にとって、この教授法は抵抗なく受け入れることができた。

翌年、これも予期せぬ偶然から工業高等専門学校に職を得て、本格的に英語教師としての生活がスタートした。高専は組織としては高等教育機関なので、担当科目の範囲内では、教員の裁量で比較的自由に授業ができたため、教室ではできるだけ英語を使用し、CLTの考え方をベースにした様々な言語活動を取り入れた授業を試みた。学生も好意的な反応を示したが、真に英語の力をつける授業にはなりえず、学生の学力や意識の変化と業務の多忙化の中で、次第に教科書と練習問題に頼り、日本語の説明を多用する教え方になっていった。

## 2. 教育と研究のはざまで：アクション・リサーチとの出会い（1990年代）

限られた時間の中で、教育と研究両面で実績を上げることが求められる高専の教師として、

多くの英語教育関係の学会やセミナーに顔を出し、論文も執筆したが、実践的研究であるはずの授業研究においても、数値や統計処理で短期間の教育効果を測る実証主義的な研究に、正直あまり意義を見出すことはできなかった。そんな中、文部省在外研究員として、再びレディング大学応用言語学センターにて8ヶ月間勉強できる幸運に恵まれた。このセンターの英語教育修士課程は、現職の英語教師を対象としており、世界各地で教鞭をとるネイティブとノン・ネイティブの英語教師が受講生であった。こうした教師たちのニーズは実に多種多様であり、どんな状況や学習者にも有効な教授法など存在しないという認識のもとで、それぞれの教師が、自己の置かれた教育現場で、自分の目標を実現できる自立性（autonomy）を育てることに力点が置かれた内容であった。教師の自立と自己成長支援に有効な授業研究の手法として、この時に学んだのがアクション・リサーチである。自分の授業改善と実践の向上に直接役立つ研究を捜し求めていた筆者は、帰国後自分の担当する授業で、自分の教える学生に直接役立つアクション・リサーチを、迷わず修士論文のテーマに選んだ。

社会学の分野で1950年代に開発された研究手法であるアクション・リサーチは、自分の置かれた状況を冷静に観察分析すると同時に、その中で自己の行動を内省（reflection）することによる気づき（awareness）を促し、自分が望む方向へ状況を変化させることのできる力を養う（empowerment）のに有効な研究手法である。

この手法も1990年代後半には、日本の英語教育界にも紹介されるようになり、近年は現職英語教員の研修や教育学部大学院生の修士論文にも活用されるようになってきた。確かにこの手法によって、教師は困難な状況に直面した際、自分のできる範囲で問題解決の糸口を見つけ、状況を多少なりとも自分の望む方向に改善していくことができるが、もともと社会学の分野で

開発された手法のため、具体的に、英語の何(what)を教えるべきかという問いに答えてくれるものではない。

筆者は、アクション・リサーチの体験によって、世の中の多数派の風潮に感わされず文献等を批判的に読む姿勢や、自分の思い込みを冷静に問い直す態度、予想外の状況に視点を変えて対応するといった自立(自律)の精神をある程度学ぶことはできたが、「言語」の専門家として、膨大な言葉の中から「英語の何」を基礎として教えずにはならないかという問いには相変わらず答が見出せないまま、不毛な実践が続いた。

研究と教育、理論と実践のギャップを埋めたいという筆者の願いが、またまた行き詰まったとき、相沢佳子氏の著書『ベーシック・イングリッシュ再考』読んだことがきっかけになって、GDM英語教授法研究会の存在を知った。

### 3. GDM教授法研究会の今日的意義

英語教育界の激しい動きや混沌とは一線を画した所で、50年以上も前に日本に紹介されたGDMという1つの英語教授法を地道に実践し研究し続けている会員が、独自の自主研修システムを作り上げ、アクション・リサーチがめざす「教師が言語教育の専門家として自ら成長し続ける」集団として機能していることは、筆者にとって感動的な驚きであった。以下、上記のような体験を経てGDMにめぐりあった筆者が感じた、この会の得がたい特質について述べる。

#### 3.1 変わらない教材

GDMで使用する教科書は唯1つ、*English through Pictures: Book I,II* (EPと略称)である。めまぐるしく変化する教科書や、星の数ほど出版され続ける英語教材の中から、自分の教育現場と学習者に適したものを選ぶのに忙しい教師にとって、1945年に初版が作成されたテキストが60年近くも使い続けられている事実は、新鮮な驚きである。

CLTの台頭以来、現実の場面で実際に使用されている言語(“authenticity”)を重視する傾向から、英語教材は次から次へと新しいものを追いかけ、外国語として最初に教えるべき英語の基礎に関して教師が共有すべき具体的なものは、今や完全に見失われている。社会の変化を追い掛け、2、3年で話題が古くなって捨てられてしまう教材とは対照的に、EPは70年以上も昔、いつの世でも変わらぬ人間と人間社会共通の事柄を表現する最小限の英語の体系を、最短距離で学べるように考案されたBasic Englishをもとに、類い稀な言語感覚を有するRichardsが10年をかけて実験を繰り返し、考えぬいて作り上げた教材である。単にコミュニケーションの道具としてのみならず、人間の思考を形成する言語としての英語を、認知的、教育的深い配慮に基づいて、精密にgradingした教材がEPである。この人類にとって貴重な財産とも呼べる教材を使い続けることで、真に学習者の言語能力、学習能力が育ち、同時に教師自身の専門家としての英語力、実践力も高めていくことが可能なのであろう。

#### 3.2 反省的实践化を育てる民主的研究集団

GDM研究会の活動の場において、他の英語教師の研修会や研究集団での常識とは、明らかに異なる慣習がある。

GDMのセミナーでは偉い講師の先生は存在しない。レクチャーをする講師やトレーニングを担当するこの道20年、30年選手の教師から、初めての参加者まで、皆お互いを「〇〇さん」と呼び合う。同僚や後輩の若手教師まで「〇〇先生」と呼び合う日本の学校文化に慣れきった教師の意識を揺さぶるためか、毎年8月に御殿場で開かれる夏期セミナーでは、「先生」づけで呼んだら100円の罰金というルールまである。一見小さなことのようにだが、セミナーの柱である模擬授業の検討時に、少しでも次の実践がよくなるよう、初心者から熟練者までが一切の遠慮やためらいなしに、それぞれの立場で真

撃に批評しあえる風土が実現されているのは、この「さん」づけルールにあるのではないかと思われる。

研究者と現場の教師が、対等の立場で協力しながら現場の実践を改善していく中で、教師が研究者としても育つという共同生成的アクション・リサーチの理想の形が、ごく自然にここでは成立している。

教員研修の新しいモデルとして、授業における自己の実践を絶えず振り返り、半ば無意識で行なった自らの行動を分析することで、自分の言語観、学習観を問い直しながら、専門家として成長していく「反省的实践家」を育てる手段として、アクション・リサーチは教師研修に取り入れられた。しかし忙しい教師が、アクション・リサーチをやり続けながら自ら成長していくことは、現実には非常に困難であるし、アクション・リサーチ仲間を結びつけるネットワーク作りも、筆者が知る限り、うまくいっている例はほとんどみられない。

一方GDM教授法研究会では、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人と教える対象や現場がそれぞれ大きく異なる教師たちが、EPとGDM教授法という優れた遺産を共有し、民主的な研修システムを作り上げることによって、見事に反省的实践家が育つ場所になっている。

### 3.3 古いGDMは時代の最先端

近年英語教育界で声高に叫ばれている「英語が使える日本人の育成」、「発信型の英語教育」、「自律的な学習者の育成」、「考える力の育成」、「英語で授業ができる教師の育成」、「反省的实践家を育てる教師教育」といったスローガンはすべて、GDM英語教授法研究会ではすでに実践されている。現実から遊離した抽象的な目標ではけっしてなく、50年も前から変わらずに一步一步、静かに、着実に、実現されているのである。

GDMを浅く広く広めるより、少数でもよいから確実に実践のできる人を育てるという吉澤

美穂氏の方針を守って、英語教育界の主流から少し離れたところで、活動を続けて来た会の方向は正しかったと思う。これからは、激動と混沌の中で、より確かなものを追求したいと願う教師が、この研究会の存在を知り、つながることで、少しでも実りのある実践をし続ける教師が育っていけるような、新たな活動も展開していく時期に来ているように思う。

### 4. おわりに

自分勝手な思い込みとこじつけと思うが、吉澤美穂氏がハーバート大学よりこの教授法を持ち帰り講習会を始めた1952年に、筆者は生まれた。そして蒔かれた種がしっかりと根を下ろし、太い幹に成長しつつある中で突然天に召された1981年は、筆者が英語教師になるきっかけを掴んだ年であった。筆者が1人、真に授業実践に生かせる英語教育研究のあり方を求めて、暗中模索していた20年間は、GDM英語教授法研究会が静かに成熟期を迎えつつあった時代のような。21世紀の始めようやくGDMとBasic Englishに巡り会い、長年探し求めていた英語教育の“*What*”と“*How*”を具体的につかむ道筋が、今少し目の前に開けている。ずいぶん回り道をしたものだ。もっと早くに出会いたかったと思う一方、今だからこそ、その価値が理解できるのかもしれない。厳しい状況の中でもこの研究会につながっていれば、英語教師としての資質の確かな芽を、育てていける気がしている。（豊田工業高等専門学校教授）

### 【参考文献】

- 相沢佳子『ベーシック・イングリッシュ再考』リーベル出版（1995）
- 安西聖雄他編『GDMを生きて』GDM英語教授法研究会（1982）
- 片桐ユズル・吉澤郁生編『GDM理論と実際』松柏社（1999）
- 片桐ユズル「GDMの易行道と難行道」GDM News Bulletin No.57 pp.1-3（2005）

深田桃代「アクション・リサーチと教師の自己実現」全国高等専門学校英語教育学会研究論集第15号 pp.66-72. (1996)

Richards, I.A. & Gibson, C. *English Through Pictures, Book I, II.* (1973) Yohan.

## 現場の教員から見た新学習指導要領

中山 滋 樹

小・中学校では2002年度、高等学校では2003年度から本実施となった新しい学習指導要領と、それに基づく新カリキュラムは、始まる前から「学びのすすめ」という題で時の文部大臣が弁明の文を発表するなど、きちんとした理論と理念が背景に備わっていなかったことが明らかになった。多少の批判を浴びた程度ですぐに揺らいでしまう、その原因について探るために、80年代以降の流れを振り返ってみた。これは、外国語教育の今後にも関わってくる問題である。

### 1. 現在の学校の状況

あらゆる段階で評価・ランク付けが盛んになってきたが、その内容がゆがんでいる。奇妙な観点別評価の導入以降、姿勢や態度、関心がどう外から見えるかということまで、成績表に残されるようになった。派手に目立つことが正しく、あたかもワンパターンな人間像を奨励している向きがある。生徒の多様な性格の発展とは正反対の方向であり、学校・教員の評価とランク分けについてもほぼ同様の問題を含んでいる。

しかし、一昔前はどうかだったか。実は、今と反対のことが言われていた。

1991年 14期中教審

ひとつの学校の中で、多様な学びができる環境を作る（現在と逆）

1993年 新学力観

「関心・意欲・態度」を重視する。ただしこの時点では、重視することが、それを基準に生徒評価することを意味したものではなかったようだ。途中から変質させられたらしい。

### 2. 教育をめぐる流れ

1) 80年代 「棒暗記では覚えられない」…量から質へ、という主張

好景気の中、教育も、量から質への転換が言われるようになった。70年代から80年代にかけて、校内暴力や暴走族が社会問題であったことから、量的にも精神的にも負担の軽い教育、また、生徒自身が興味を感じられる授業が求められていた。

2) 90年代 規制緩和・自由化が強調される風潮  
多様化と「ゆとり」については、ふたつの異なる方向がある。ひとつは、経済論的なものであり、競争に有利、便利な少数のエリート育成等、学校教育の後の損得に焦点がある。もうひとつは、教育学的に、より多くの生徒児童の満足感が高い教育にしたいという、教育内容自体の多様化を志向するものである。両者は視点も目的も全く異なるが、いずれも教育に贅沢に人手も金もかけるという点では一致し、したがってこの時期の学習指導要領も「贅沢路線」で作られていった。ここに、新学習指導要領の矛盾、つまり、“贅沢三昧”を要求する90年代の文言と、時代が下って現実の2000年代には人も時間も金も“無い無い尽くし”の学校現場との間の矛盾が発生した理由がある。

3) バブル崩壊後の動き…“無い無い尽くし”の実態

90年代の初めにバブル経済が崩壊して以降、学校予算の削減と、それともなう人員のリストラにより、講師など時間削減されるとともに、教員の持ち授業時間数が増加していき、以前か

らの状態を維持することさえ難しくなっていた。現場への新たな要求・負担を果すための人員・時間・予算は、まったく提供されなくなった。そこに、以下のふたつが追い打ちをかける形となった。

- ・「ゆとり」と呼ばれる時間削減：週5日制の導入で、現場は忙しくなった。
- ・観点別評価（90年代前半）：物理的に無理があり、また機械的で無意味な評価の導入。

### 「ゆとり」という時間削減

学校週5日制の導入は、結果として、週に6日かけて教えていた同じ授業内容を5日に短縮させられ、そこに歪みが生じた。教育関係者の言う「ゆとり」とは、10時間かけて教えていた内容を11時間かけられるようになることだが、文部科学省等の「ゆとり」は、10時間かけていた内容を9時間に圧縮することであった。この矛盾に対し、新指導要領では教科内容を削減してつじつまを合わせようとしたため、大きな反発と混乱を招いた。

### バブル期の“贅沢三昧”のなごり

#### (a) 観点別評価の導入（90年代前半）

多項目の観点別に個々の生徒を評価するには、教員ひとりあたりの生徒数がずっと少なくなることが前提となる。つまり、生徒20人台のクラスサイズになるという、バブル経済期の楽観的見通しで構想されたものである。

#### (b) 教科横断的授業という考え方

“暗記中心”授業への批判には、教科内のタコツボ的状况、つまり、授業内での学習が他の事柄とどのような結びつきを持っているのかが感じられない点も含まれていた。そこで考えられたのが、これまでの教科の区割りをある程度崩して、いろいろな要素を含んだものを学校のカリキュラムで可能にすることだった。教科割り・時間コマ割りの自由化・流動化である。しかし現実には、小学校の「生活科」のようなも

のがない中学や高校では、それを受け入れる基盤が存在しておらず、また、既成の教科枠組みを壊すということ自体が、行政的には避けたいことでもあった。

しかしながら、暗記中心でなく、教科横断的で自由化の進んだカリキュラムを形式上は作らねばならないため、新指導要領のために苦肉の策として生み出されたのが、「時間割上に特別のコマを新設して、その中に、教科横断的・自由化と呼ばれるものを押し込む、そしてそのコマの外側はいじらない」というものである。要求された新しい学習（暗記中心でない学び）は、形として（コマとして）存在させたことで、名目は立つことになった。そして、他教科とは全く混ざりも交わりもしない孤立した時間枠がぼつんと発生することとなった。こうして、机上の論理で、本来出発した理念からは全く異なった形にねじ曲げられた形態で出てきたものが、「総合的な学習の時間」と呼ばれるものである。互いに個別化している教科を交わらせたいという発想から出発したものが、全く逆の性質の結末になってしまった。

このように、つじつま合わせとして生み出された矛盾の存在が「総合的な学習の時間」であり、現在の学習指導要領である。この「総合的な学習の時間」の時間枠内は、内容に関しては、全く空白である。そして同時に、理念は当初のまま「教科横断的で自由」である。総合的な学習の時間に関する教員のジレンマは、ここから発している。

#### 現場のジレンマ：

- ・「教科横断的で自由」な授業をやるには、それを可能にするだけの時間、研究、人手が必要である。しかし、そのような資源は全く与えられない。
- ・しかしながら、「総合的な学習の時間」を成立させる責任を負わせられている。失敗すれば、生徒が混乱し、学校が乱れる元になる。そして、失敗の原因は教員のせいになってしまう。また、これは、「教育を自由にするか

ら学校が乱れたのであり、これからは一貫した統制が必要である」という嘘をはびこらせる恐れもある。

(c) リストラの中で、複雑化・多様化を実現するという矛盾と、学校現場

教育の規制緩和・自由化には、ふたつの相反する方向があった。90年代には、数値的結果が安易にでてくるようなことを教育に組み込むことは、生徒個々の人間的成長を阻害する非教育的な時代遅れの発想とされ、偏差値などは非難の的となっていた。むしろ、数値で計れぬ自由化・多様化を良しとする風潮であった。なお、この頃の多様化とは、生徒個々人の多様化のことであり、学校等組織の多様化・複線化を指すものではなかったことは重要である。

しかし、バブル崩壊以降、低予算の中でリストラをしながら、多様化をする、しかもそれを形に表すという、行政的な必要性が生まれ、そこからいくつかの転換がおこなわれた。

- ・自由化、多様化を、生徒個々のことではなく、形として見えるもの(例えば「学校の個性化」、数値的評価)のことをいうようにすり変えていった。
- ・リストラを「構造改革」と呼べるための理由付けが必要であり、そのために、民間企業でのリストラをモデルにして計画を立てることになった。その結果として、経済論的な観点が勢力を持つようになった。

4) 2000年代…「弱肉強食」的な多様化への変質  
小学校・中学校では2002年度から実施の新カリキュラムは、その根拠・基盤がきちんとしていなかったため、始まる前から修正必須と見られていた。

(ア) 理念として

学習内容の3割削減と、学力低下論との衝突は、記憶に新しい。ただ、学力という言葉の中身について、きちんと検討されて共通理解ができて

いたのかというと、それは疑わしい。

- ・学力とは、3割削減、というように、数で表現できるようなものなのか？
- ・教育現場が、学習内容削減を望んでいたのか？
- ・「ゆとり」というが、時間削減がゆとりなのか？ 時間削減のつじつま合わせとしての内容削減がゆとりなのか？
- ・学力低下論には、客観的データがあるのか？ 学力低下があるならば、その理由は、具体的に何であるのか？

これらの客観的な分析無しに、非論理的な発言が飛び交っていた。

(イ) 実務面で

新カリキュラムは、基本的に、規制緩和と自由化という方向性を持っていた。新しいものを考え出し、作り出すのであれば、それには当然、その時間的余裕と人手とが資源として前提となる。つまり、資源無しには、何も作れないという当たり前の状況が発生した。

教育予算削減が前提のため、行政上の課題として、「学力低下論への弁明」をしながら「リストラ」を進めていく必要が生まれている。そのために、“効率的な”教育システムへの構造改革をとという主張になるが、そこから必然的に多くの問題が出てきている。

- ・「教育はサービス業」論(今の要求を満たすことが第一で、将来のことは関心外になる)
- ・数値目標と目標達成度による、「学校経営」評価(学校のために生徒がいるという発想)
- ・経済利益と教育成果との混同と、その結果としての教育目標の変質(利益と効率追求)
- ・利潤追求のための、構造的自由化(生徒のため、が第一義でなくなる)
- ・一部分の優遇や、自己の利潤確保を正当化するための、新自由主義

形態的な自由化が進められ(学校間の待遇の序列化など)、子供に選択の自由を与える、とい

いながら、選択後の扱われ方は大きく異なるようになった。一部の優遇された特権的学校に投資が集中し、一般の多くの学校には大規模な予算削減が繰り返されている。

### 3. その中での、英語教育

コミュニカティブのかけ声の下で、実際に起こっていること：

- ・週3時間（中学）の英語授業
- ・教員が授業準備をする時間がない
- ・「英語が使える日本人」のかけ声
- ・小学校での、英語導入

コミュニカティブとは、幾通りかの定義付けはあるものの、世間には、町場で実際に使われている言葉をそのまま取材してくればよいという考え方から出られない例が多い。その結果が、現在の教科書検定にもあらわれており、“Burgershop English”などと揶揄されている。そこでは、センテンスやフレーズを、その日本語訳と1対1対応で棒暗記するという学習スタイルが基本になってしまっている。（ここでは、「意味」とは、「日本語訳」のことであり、意味とは何かについて考慮に入れてはいない）

いきおい、現場の教え方も、提示されたフレーズのバリエーションを増やして練習していくことが中心になり、「飽きない繰り返し練習」の技法に関心が向けられがちになる。これは、センテンスと反応の1対1対応の学習なので、英文の構造にしる、意味内容にしる、「なぜそうなるのか」という点が考慮されなくなる傾向を生んでいる。

「英語が使える日本人」の育成のための行動計画（文部科学省：平成15年）」という短時間で作られた文書についても、何をもって“使える”というのかについての考察が欠けているながら、それに沿った授業をしるという要求・強制があるので、ますます現場は、実際に使われる文を反復練習していればまず安全だろうという判断になっていく。また、反復型学習には、

ひとたびパターンを生徒が覚えると、教員の手間がかなり軽減できるという利点がある。リストラによって教員が多忙になっている現状では、ある意味やむを得ない感もある。

「自由化・規制緩和」が、生徒たちの自由ではなく、教育をめぐる構造の自由化にすり替わった時点から、学校は民間の自由競争原理の場に近づけられつつある。それは、競争の結果を見えやすくする必要があるので、価値観を単純化し、生徒や学校、教員を、それに基づいて評価するという意味もある。

英語教師も、最近は何度も、外国語教育とは縁のないさまざまな人に「授業観察（監察）」をされ、「外部評価的にわかりやすい授業」をしないとイケない。そのような中では、生徒に深く考えさせるより、生徒全員が元気に声を出しているところを見せれば大丈夫という、観察者側の能力レベルに寄っていったとしても、実際にその評価で転勤や給与が変わるのであれば、教員を非難できないだろう。

これは、行動心理学ベースの（ひとつの刺激にひとつの反応を反射的につなぎ合わせ、その結合を反復練習により強化するという）“1対1対応”型授業がこれから隆盛を迎えるという予測になる。つまり、認知型であるGDMなどは、さらに“受けない”時代が来るとということにもなる。

中学・高校の外国語授業のほかに、小学校での英語導入も、たいへん大きな問題がある。これも、臨床的には音声面以外に効果はないと結論が出ているのに、教育行政の自由化の影響で、低年齢での英語導入が加速している。どうやら、「得になりそうだから」「よその国で小学校からやっているから」という、あいまいな理由のみでおこなわれているのではないかと。何かに取り組んだという形を見せたいという、大人の都合であろうか。おそらく、ほとんどの英語教師は、特別に時間の余裕と人材を得られた小学校以外ではやらない方がいいと思っているだろうし、それよりも、そのぶん中学校で週5時間に直し

たなら、遙かに全体の英語力は上がると考える。子どものことを考えれば中学での週5時間という英語教育になるはずだが、そのようにならないのは、肝心なことを「教育の素人」が決める構造的欠陥によるものである。基本的に、英語教育関係者が英語教育の将来を考え方向付けていくように変えることが、教育の世界で本当に必要とされている。

現在の状況をそのまま受け止めると、希望がまったく持たなくなる。ただ、行政指導面とは全く別に、現場の教育者間では、しばしば国境をもまたいでさまざまな協力や意見交換がネット上でおこなわれるようになってきており、こ

れまでとは全く別の角度から、新しい展開が発生する可能性がある。近年の情報化の発展と、教育への高い注目度は、良くも悪くも急激に状況を変化させることがある。そして、潜在的には、文法をきちんと学べる学習方法についての欲求がある。これは、5文型の文法書を何度読んでも機械的の反復練習をたくさんやっても届かないらしいということは多くの人が感じているが、それではどうすればいいのかという代替案を持っていないという状態といえるだろう。長期的には、いずれはそれを満たす、正しい文と意味とがきちんと結びつく教え方が本道になる時代がくるはずである。

(東京都立武蔵丘高等学校教諭)

## GDMを取り入れた授業実践 － 時制の感覚の定着を目指して －

松浦克己

### 1 はじめに

先日(平成18年2月6日)朝日新聞のコラム「窓」に次のような記事が載っていた。

先日、ブッシュ大統領の議会での演説を聞いて、気になったことがある。開戦から3年近くたっても治安維持さえままならないイラクについて「We are winning」と現在進行形を使っていたことだ。大統領はとうの昔に実質的な勝利宣言をしていたような気がするが、それなら過去進行形や現在完了形で語ってもよいはずだ。

手近にあった参考書をひもといた。進行形の基本イメージは、「行為・活動のまっただなか」という。勝利しつつあるが、まだ完全に勝利しきっていないということのようだ。時制として未来形も可能ではないか。「We will win」と言ったらどうだろう。同書によると、助動詞willは精神力を表す。「勝つぞ」という感じか。じゃあ、「We are going to win」ならどうか。こちらは「ある状況に向けて動いている。流れの中にいる」表現なのだという。イラクの客観

情勢からはそんな確信は持てない。とすると、大統領はいま米国民に言いやすいのは、「今勝っている最中なんだよ」と幻想を与えて、安心させられる現在進行形ということになる。

英文法というと、S+VだのCだの、学生時代は頭を痛めることが多かったが、その感覚をつかめば、国際政治を読み解く上でも意外と役立つものだ。

英語学習の初期にあたる中学校の英語教育では、ワードオーダーと時制の理解が大きな目標となる。ともに日本語の感覚と大きく異なっているため、文法的説明をいくら積み重ねても、英語学習の初期においては十分な理解をさせることが難しい。

### 2 時制の教え方

#### (1) 教科書の扱い

時制の理解が難しい理由は、日本語に時制の感覚がないことがまず挙げられる。そして日本語にその感覚がないのに、日本語に直して英語を理解しようとするれば、十分に理解できないの

も当然である。また、教科書の指導順序にも問題がある。教科書（東京書籍ニューホライズン）では次のように教える。

1年4月 … be動詞現在（is am are）  
1年6月 … 一般動詞現在（一，二人称）  
1年10月 … 一般動詞現在（三人称）  
1年12月 … 現在進行形  
1年3月 … 一般動詞の過去時制  
2年4月 … Be動詞の過去時制  
2年4月 … 過去進行形  
2年5月 … 未来時制（be going to）  
2年9月 … 未来時制（will）

GDMの順序と比べると大きく違っている。GDMではbe動詞の現在時制のつぎに三時制を教えるのに対して、教科書では1年4ヶ月かけて三時制を学び、やっと身のまわりの動作を言うことができるようになる。1年の間は「明日テニスをするよ」「今日は夕食の前に宿題をするよ」といったごく普通の文が言えない。1年ではほとんど現在時制だけである。しかし身のまわりの動作はどうだろうか。例えば、「ドアを開ける」という動作はどう流れるだろうか。机を離れてドアの方へ歩いているときは、He will open the door. ドアに手をかけて開けているときは、He is opening the door. そして廊下に出たときは、He opened the door. という流れである。つまり動作は「未来時制」→「進行形」→「過去時制」というふうに流れていくのである。なんとなくぼんやりと考えていると、過去→現在→未来と思いがちであるが、それでは英語の時制は理解することができない。この「未来時制」→「進行形」→「過去時制」の流れをつかませること、その使い分けが時制を理解する第一歩であり、必要条件であるが、上記のような指導順序では、なかなか難しいと言わざるをえない。

また、一般動詞の現在時制を一・二人称と三人称に分けて、それも4ヶ月以上も間隔を開け

て教えるのも、学習者にとっては最終的には理解しづらいものにする原因となっている。日本語との違いをあまり感じさせずに、その場だけは分かりやすく感じるような配列となっているが、結局は英語の基本的な感覚を理解させることが難しくなってしまう。

## (2) 教科書との連携

このような教科書に対して、GDMをどう取り入れれば、効果的なものとなるかを考え、次のように計画した。

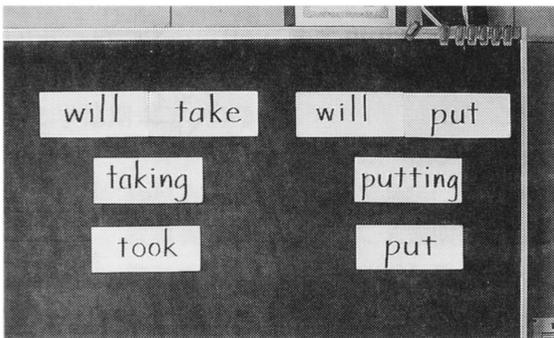
I 6月上旬 <GDM>  
take, put の三時制  
II 6月下旬 <GDM>  
was were, give の三時制  
III 7月上旬 <GDM>  
go, come の三時制  
IV 9月上旬 <GDM>  
一般動詞現在（see, sees, have, has）  
V 9月下旬 <教科書>  
一般動詞現在（like, play, walk, want）  
VI 11月中旬 <GDM>  
see の過去時制，did を使った文  
VII 12月中旬 <教科書>  
日常生活の中の一般動詞の三時制

まずGDMを使って、三時制と現在時制を理解させ、習熟させた。そのあと教科書を使い、一般動詞の範囲を広げていった。VからVIにかけての時期では、play や walk といった一般動詞を三時制で使うことは、できうる限り避けるようにした。短い期間に急激に語数を増やすことは、学習者にとって大きな負担となり、せっかく形成されつつある三時制の感覚を崩す恐れがあるからである。

## (3) ルール化と広げる力

次に課題となるのはGDMで理解し、つかみつつある時制の感覚を、どうやって整理させて

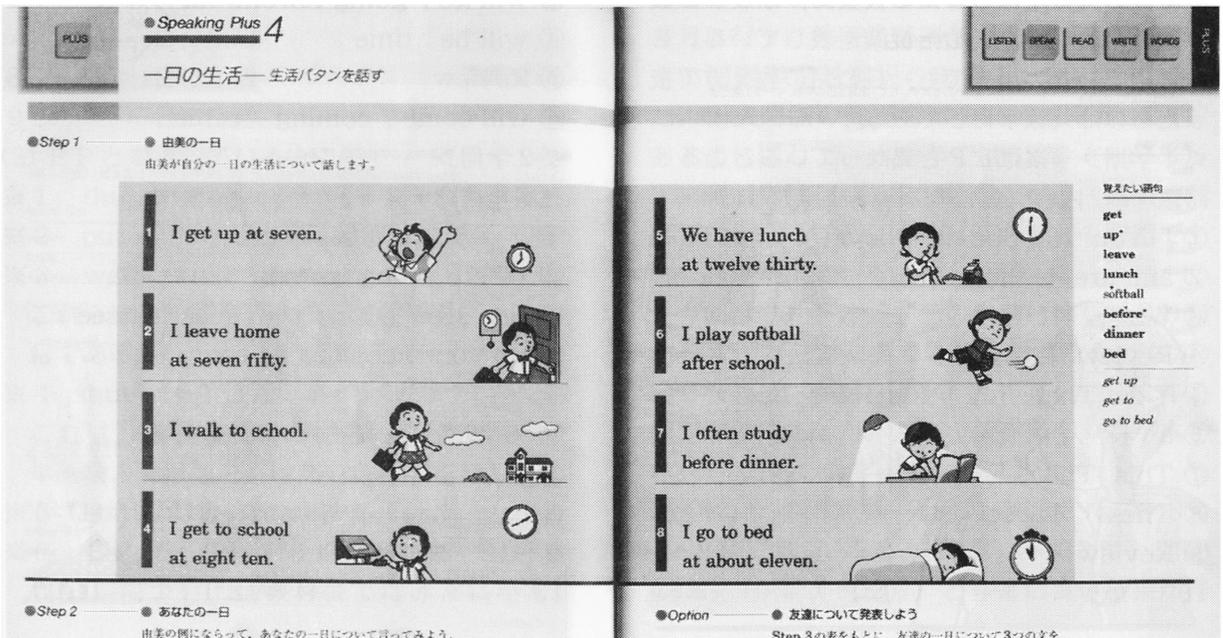
いくつかである。前ページの指導の流れの表のVIからVIIにかけて(12月上旬), それまでにワードカードを下の写真のようによく黒板に貼って確認してきたので, それを活用して, 上から1番の言い方, 2番の言い方, 3番の言い方と呼び, どうやって使い分けているか説明させた。そうすると生徒は「1番を使うときは, これからやる時」とか「今からやろうとする時」と発表した。2番は「やっている最中」とか「やっている途中」と説明した。進行形とまとめるよりよほど適切である。3番は「すんだあと」とか「終わってから」とまとめていた。このあと, 現在時制の形を4番として三時制と比べて考えさせた。生徒は「いつものこと」とか「たいていすること」という感じでまとめていた。



この使い分けに関しては, 6月上旬に導入してから12月まで, 教師の口から日本語での説明はしていない。つかむのに時間がかかる生徒もいるが, 安易に日本語で文法的説明を与えることは自分で考える姿勢を失わせてしまうと考えられているからである。

このようなルール化ができれば, 次の段階では, それをtake, put, give, go, comeといった動詞(生徒は品詞名は知らないが)だけでなく, 教科書で習ったplay, walk, study, watchといった語でも同じ考え方で使えるということを感じさせ, 自分で広げて使っていく力をつけることが必要である。

その方法として, 1年生の内容で適切な題材は, 一日の生活を扱っているところである(下の写真)。教科書では現在時制の練習として出されているため, 自分の生活に基づいて話しても, もうひとつリアリティに欠け, どうしても練習をさせられているという気持ちが抜けない。それに対して, 今朝起きた時間を言う, 今日帰宅後何をするか, いつも何時に夕食を食べるか, 明日何時に起きるか, 昨日何時に寝たか, という内容は事実であり, 同じ教室内の練習でも生徒の取り組む姿勢は大きく違ってくる。ま



た、実際の日常生活のなかで過去時制、進行形、  
未来時制、そして現在時制を使い分けることは  
重要で、広げる力をつけるのにも有効である。

I got up at seven this morning.

I will do my homework before dinner  
today.

I usually have dinner about eight.

She usually has dinner about eight.

I will get up at six thirty tomorrow.

I went to bed about eleven yesterday.

ある程度慣れてきたら、それに疑問文と否定  
文をまぜて使えるように練習させた。しかし、  
この内容は1年の後半で数時間練習してほとん  
どの生徒に理解させられるほど簡単ではない。  
よって、あせらずじっくりと指導していくこと  
が大切である。私の場合は、1年生の間になん  
とか理解できて、単語の数も少しずつ増やせれ  
ればよいと思っている。

### 3 授業記録

#### (1) 実際の指導順序

GDMと教科書の指導をどのように行ってき  
たかを、今年度の実際の指導例で報告したい。  
本校は週4時間で行っている。

時数の丸数字はGDMの授業で、ふつうの数字  
は教科書を中心とした授業を表している。E  
Pに出ていない単語でも、GDMの教え方で扱  
ったものは丸数字にしてある。

<1学期> ※はEPと異なっているところ

時数 内容

① I You He She It They

② am are is here there

③ We

④ Review 確認テスト

⑤ This That my your his her

⑥ a

⑦ This That

⑧ These Those

⑨ Review

10

A L T



11・12 教科書 Unit1

⑬ in on the

⑭ Review

《1学期中間テスト》

1 テスト返し

2

A L T

③ What is in the bag? What is this?  
off

④ is taking took is putting put

⑤ will take will put it

6

A L T

⑦ Review

⑧ was were

⑨ them

10~12 教科書 Unit2

⑬ will give, giving, gave

to him, me, her, you

⑭ its open close

⑮ of

⑯ their our Review

⑰ a leg legs the legs the leg

《1学期期末テスト》

1 テスト返し

2

A L T

③ will go / going / went at

④ will be time

⑤ Review

⑥ will come / coming / came

<2学期>

《課題確認テスト》

1 テスト返し

② Where thing person

③ see sees do not see does not see

④ Do you see Does he see

5

A L T

⑥ Review

⑦ have has

⑧ have has 補充 教科書Unit 3 (1)

9~12 教科書Unit 3・4(2)

13

A L T



- 14 教科書Unit 4 (3)  
《2学期中間テスト》
- 1 テスト返し
- ② after / before
- ③ or 
- ④ one another the other
- 5 A L T
- ⑥ many any some
- 7 教科書Unit 5(1)(2)
- 8 A L T
- ⑨ will say saying said
- 10～13 教科書Unit 5・6(2)
- ⑭ with between
- 15 教科書Unit 6(3) 
- ⑯ saw did not see
- 17 教科書Unit 6(4)
- 18 A L T
- 19 教科書Unit 6(5)  
《2学期期末テスト》
- 1 テスト返し
- 2 教科書Unit 6(6)
- 3 教科書Unit 7(1)
- 4 教科書Unit 7(2)
- ⑤ had did not
- 6 教科書Unit 7(3)
- 7 一日の生活
- 8 一日の生活
- 9 一日の生活

(2) E P と変更しているところ

※1 thumb finger

※2 put it on took his hat off

※3 water ship

これらは、時間数との関係で省略している項目である。

※4 shut

これは、教科書でshutが扱われないので、単語数の負担増を避けたいからである。

※5 cord hook frame

※6 E P の30ページ

What については教科書では非常に早く、

Unit2で出てくる。定期テストで教科書の範囲がないのは避けたいことであるので、E P よりもはやく what を教えている。

※7 was were

これも時間数の関係から1時間で扱っている。

※8 one the other another

1時間で理解させることはできるが、E P のように one と the other のあと another を教えた方が、前述した「広げる力」をつけるのに有効であるが、時間数の都合でこうしている。今後の課題のひとつである。

※9 did saw

これはこのあと教科書に戻らなければならず、その教科書 Unit3 では一般動詞が多く出てくるので、生徒の負担を考え、過去の疑問文や否定文を遅らせて指導している。

以上、E P との変更点にはそれぞれ理由があるが、できるだけE P どおりに実施できるように工夫していきたいと思っている。

#### 4 おわりに

##### (1) 検査の結果から

平成16年度に卒業した生徒が1年の時にもほとんど同じ流れで指導した。彼らが、3年の4月に行った教研式標準学力検査では時制に関する問題が適語選択の形式で3問出されていた。過去時制の問題では全国通過率が45%であるのに対して、本学年では62% (+17%)、未来時制では71%が80% (+9%)、過去進行形では60%が74% (+14%) とどの問題でも良い結果が出ている。

今回はワードオーダーの理解に関してGDMが非常に有効であることには触れなかったが、同じ検査で、単語を並べかえて正しい文を作る問題が4問あった。左が全国通過率、右が本学年、( )内の数字がその差である。

問①30%/48% (+18%) 問②39%/48% (+9%) 問③59%/92% (+33%) 問④48%/70% (+22%) と非常に良い結果が得

られている。

## (2) GDMの魅力, その可能性

「考える力を育てる」という言葉はいろいろなところで見かけ、また教育の大きな目標の一つである。しかし「考える」という行為は非常に複雑で高度な作業であり、それを計画的に指導し、その目標を達成していくことは大変難しい。また、「考える」という言葉があまりにも日常的に使われるため、何となくその意味するところが分かったと錯覚していることが多い。考えることができない生徒に、「よく考えなさい」と言っても無駄であるが、よく見かける授業風景である。「考える」という言葉を使わず

に、もう一段階より具体的な行為を挙げてみると、何をどう指導していけばいいかはっきりする。

GDMでは、いくつかの例から共通点を抽出したり、今までのことから次のことを類推したりなど、考える力を育てるために有効な活動を効果的に無理なく、段階的に行わせることができる教授法である。GDMの教え方を見なおしてみると、どういう指導が「考える力」を育てていくのに有効かを知ることができる。今後もGDMの優れている点を、公立中学校の英語の授業に取り入れていく方法を工夫していきたい。(愛知県小牧西中学校教諭)

## 高齢者の市場を開拓しよう

新 井 等

長年いた学校を去年、早期退職したので「新井さん、ひまで困るでしょう」といろいろな人に言われますがそれほどでもありません。今は週に2回、近所の小学校の空き教室を借りて大人のクラスをやっています。一つのクラスには30代、40代の人もありますが、もう一つは60歳以上(たぶん)の女性ばかり6人です。皆さん、老眼が進んでいるので(教えている私も)、授業の始めと終わりに *English through Pictures* を個人で読んでもらうとき、読みまちがい、読みとばしがたいへん多いです。耳の遠い方もいて、直すのもたいへんです。去年までの良くも悪くも元気な高校生のクラスとは別世界です。EPの文字は太いけれどにじんだようになっていて老眼にはきびしいです。その読みまちがいを毎週、聞くうちに、GDMの市場は高齢化社会で大きく開けると感じました。

### 1. こんなふうにはEPを読みまちがえる

They, There, These, Those はもうごちゃごちゃです。a と o, e と o の区別もきびしいです。実例をいくつかあげます。何をまちがえているのでしょうか。最後の2つはちょっとむ

ずかしいかも知れません。

The long hand is of five.  
This body is on his feet.  
She will be with his to the window.  
There are the covers of the hook.  
I took is from the shelf.  
He has no arms on hands.  
He is three now.  
This is a feet.  
There is my hat?  
She saw it other went to the table.  
There are twos.  
There is other two.

### 2. 読みまちがいにはいろいろ理由がある

読みまちがいが多いのは老眼のせいだけではなく、他にも次のような理由があります。

\*EPには絵を示して名前を教えたり、説明したりする文が多いので、th- で始まる語がたいへん多くてまぎらわしい。

\*Book 1の前半は little words を教えるのが中心なので、ほとんど1音節の短い語だから

長さで区別がつきにくい（字が多いのは picture, question, through, between, bookshelves くらい）。

- \* 細かく分解して一つの動作を教えたり（例えば will take, taking, took ）、いくつも実例をあげて説明したり（例えば A house is a thing. Hats are things.）するので、一つのページに変化形が何度も出てくる。

### 3. 読みまちがいが多くても授業に支障はない

始めのうちはけっこう神経質にまちがいを直していましたが、このごろは軽くしか直しません。理由は以下のとおりです。

- \* 人に自分の声を聞かれているので緊張して、字を追うのに必死。絵を見る余裕がない。授業の他の部分では situation によって発言するので読みのまちがいが引きずられることはない。
- \* 読みまちがっても、取り違えた語と音の長さが同じだから、文全体のリズムは崩れない。読む練習に十分になっている。
- \* GDMの授業で習っていない語と取り違えることはないので、EPの世界からはずれていない。
- \* だから、GDMで習う以前の知識の差が読みに現れない。まちがえても引け目を感じない。うまく読めないからといって授業に対して消極的にならない。

### 4. GDMは高齢者に向いている

こんなにまちがうようでは、文字から入って暗唱を前提にする授業では致命的でしょう。でも EP の授業ならあまり問題になりません。読みまちがいしやすいという EP の特徴が逆に老眼のハンデを補っているともいえます。GDMには他にも高齢者にやさしい特徴があります。

- \* 実際のもを見たり触ったり、自分が動いたりすることから始まるので目や耳の衰えがあ

まりハンデにならない。文字を読む時間は授業全体の5分の1に過ぎないので高齢者でも十分に対応できる。

- \* GDMでは基本的に1時間に一つのことだけを手を変え品を変え教える。余計な情報を受け止めなくていいから体力があまり要求されない。
- \* 教室の中の自分と他の人の微妙な立場の違い（座っている位置とか見え方とか）が発言に反映されるので、人の言うことを聞くことで理解が深まる。高齢者は目先の実利や競争とすでに離れているので、人の言うことに耳を傾けるのが一般に得意である。

### 5. 高齢化社会にGDMの活路を見出そう

GDMの授業ではすでに知識を持っている人がとりしきるといことがありません。誰でもそれなりに活躍しておたがいの学習を助けます。うまくいっているGDMのクラスではみんな仲良くなれます。

元気な高齢者がどんどん増えていくようです。高齢者は目先の実利よりも仲間を求めて教室にやってきます。毎時間、少しずつ確実に学習し、余計なエネルギーを使わず、しかも人間関係が深まるGDMには高齢者に歓迎される要素が大いにあります。学校に進出することも大事ですが、拡大する高齢市場にも注目する必要があります。

ただし、私たち、教える側も高齢化していくので膨大な準備がいらぬ簡素な授業モデル（教師にも生徒にも楽な）を考えないといけません。また、高齢者はすでに英語学習に何度も挫折していますから、宣伝のフレーズには工夫がいると思います。

(GDM英語教授法研究会員)

# 小学生英語教師養成プログラム：GDMによる授業実習 プール学院大学「初等英語教育」2005年度授業報告

松川和子

## 【まえがき】

日本の小学校英語教育はこれまで私立の小学校を中心として行われてきました。公立では92年から必修化に向けて文部科学省の研究開発学校で実践研究が行われてきており、2002年の学習指導要領では「総合的な学習の時間」を利用した「国際理解に関する学習」の一環としての英語活動が奨励され、以降2004年ではおよそ92%の小学校で年間1～11時間の範囲で何らかの英語学習が実施されました。

このような英語必修化の動きを受けてプール学院大学では「中学校以前の子どもたちに英語を教えるにあたって学んでおくべき内容と教育方法を」との内容で「初等英語教育（選択科目、通年、週1、2単位、2～4年次）」の授業を2005年度に設けることとなりその講師として一年間授業を行いました。これは2006年3月26日にGDM初級・中級セミナーでの報告に加筆したものです。

## 【授業のシラバス】

最初は一年間の授業として *English Through Pictures Book I* p.30あたりまでの学習と模擬授業、短い実習などを考えていましたが以下に述べるように小学校の4年生を対象として数回の授業が可能となり、また前期修了の時点で民間レベルではあっても小学校英語指導者としての資格取得を目指すようなカリキュラム編成ができないかとの打診があり、シラバスとしては次のような形にまとまりました。

中級Ⅰ：GDMについて学び自信を持って教える力を養う。

- ①講義（GDMや Basic English の理論、小学校英語教育、国際化と日本の英語教育等）
- ②授業体験（教師による模範授業とグループによる模擬授業）
- ③小学校での授業実習（はるみ小学校4年生の授業）

中級Ⅱ：GDMでさらに教える力を養う。

- ①講義（小学校英語教育の歴史、現状、早期英語教育等）
- ②授業体験（教師による模範授業とグループによる模擬授業）
- ③小学校での授業実習（はるみ小学校4年生の授業）

## 【小学校での授業実習について】

実習については、できれば夏休みなどを利用して近隣の小学校で授業ができないか、大学側に希望を出しておりましたが夏休みは登下校の安全の問題もあり、小学校の総合の時間を利用した形で英語の授業を行う可能性が検討され、快く受け入れを表明していただいた近隣の堺市立はるみ小学校に決定しました。プール学院大学ではこれまで地域の小学校とは「サービスマーケティング（小学校に出向いて授業などのお手伝いをする）」を通して緊密な連携をもっており、そういった経験から今回の受け入れ先もスムーズに決まったと思われます。実習の学年を決定するにあたって、5～6年生はすでに民間の会話学校に依頼して、英語活動を行っている関係や物おじせず新しいことに溶け込める年齢

などを考慮し、4年生に実習を行うこととなりました。

学年：4年生2クラス（34名，35名計69名）

回数：前期の授業実習として，6月9日～30日毎木曜4回（小学校5限，毎40分の授業）。

1，2組の授業を平行して行いました。

クラス①：I, You, He, She, It

クラス②：It (He, She) is here (there).

クラス③：I am here. You are here (there).

クラス④：This (That) is my (your) hand.

後期の授業実習として，11月10日，12月1日及び8日の3回（5限 各40分）

クラス①：This (That) is his (her) hand.

クラス②：These (Those) are my (your) hands.

クラス③：These (Those) are his (her) hands. まとめとして既習文を使ったクリスマスカードの作成をしました。

実習学生の数：各クラス2名の学生が協力して授業を行いました（前期15名，後期11名が実習）。ただし，他の講義との関係から後期の履修ができなかった学生，また後期から履修をした学生などがあり，前期，後期を通して実習を行った学生は5名でした。

実習の実際：小学校5限開始の1時45分までに実習学生4名が小学校に集合し授業実習をしました。実習の様子はビデオに録画。担当学生はすぐに大学に戻り，3時10分からの授業に出席，その日の授業ビデオを観察し，実習生は授業記録や反省を，他の学生は感想を書き，それらの記録は私がワープロで打ち直して次週に資料として配布しました。

## 【一年間の授業を終えて】

### ①試行錯誤の一年

初めて大学のシラバスに組み入れられた授業であること，30名以上の小学生を前にGDMで教える事のできる学生を育てること，実習先の先生方との連絡や交渉，大学事務局との連携，ビデオの準備や撮影，記録のまとめや講義など今振り返ると未知の経験が多く大変でしたが，同時に一人一人の学生の個性や力を感じることができました。特に，前期，後期を通じて受講し実習を行った5名の学生については後期の実習での余裕を持って生徒に対応し，Sen-Sit（注①）を考慮した授業態度に確実な成長をみることができました。

### ②大学側の強力なサポート

この授業の講師として私を推薦してくださったのが会員の伊達民和さん（プール学院大学教授）でこれまで大学主催のセミナーにGDMを取りあげたり，担当の英語科教育法に長年GDMを取り入れたカリキュラムを設けてこられた経緯があり，また共著「国際文化学」（アカデミア出版会 2002年3月）の中でも入門期の効果的な指導法としてGDMを紹介しておられるなど大学側の理解と協力が得やすい環境を整えていただきました。また同じく会員の大田垣裕子さん（プール学院大学助教授）は大学の教務担当として大学との折衝，実習先の小学校の選定と交渉等全てにわたり手助けをしていただきましたし，GDMについてはさっそく2005年度のGDM夏期セミナーに参加されてGDMを体験され，

授業や小学校での実習の見学など一年間の推移を見守っていただきました。こうしたお2人の強力なサポートのお陰もあって授業や実習がスムーズに行われ、良い結果を得ることができたと思います。

### ③はるみ小学校の理解と協力

校長先生、教頭先生、4年生の先生方をはじめ実習先の小学校がGDMをよく理解して下さったことは大きな喜びでした。はるみ小学校の教育方針として「身体を通して生きる力をつける」、「人とコミュニケーションできる力をつける」、「自分を表現できる子どもに」などがあり、近隣の高齢者を招いて伝統文化を学んだり、サービスマーケティングを通して大学生と交流するなど外への広がりや視点を持っている小学校であることがGDM理解にも繋がっているように思われます。実習の時には担任の先生方が生徒の中に入って一人一人の様子に目を配り、集中できるようにして下さったり、生徒と一緒に英語を言ったり、ビデオの準備や撮影、ワークの回収や配布など大変お世話になりましたし、まだまだ未熟な学生を暖かく見守っていただきました。

### ④期待以上の学生の力

授業評価に実習が入っているため学生は前期、後期に必ず各一回の小学校での実習を体験しました。実習に行くまでに6回程度の模擬授業で一応GDMの考え方、授業のやり方を学習するとはいえ、direct method で実際に35人の小学生を教える体験は極度の緊張を強いるものだったのですが自分の担当箇所をなんとか生徒に分かせようと懸命に努力しました。また前期4回、後期3回の80分にわたるビデオ観察もおろそかにせず、貴重な意見を多く書いています。それらの記録を見ると、回を重ねる毎に学生の生徒を観る視点の変化や重要な注意点についての気付きが読み取れます。例えば指導者の I, You の目線と He, She の目線の違いはどうか。here, there の立ち位置はどうか。指導者の発言を生徒たちがそのまま復唱してよいのか。例えば指導者にとってある物が It is here. と言える場所にあつてその文を言ったとき、そこから離れている生徒がその文の置かれている場面を考えず It is here. と聞いたまを繰り返してよいのか（つまりGDMでいうところの Sen-Sit (注①) に基づいた見かたができないで間違った発言をしている場合)。全員に目配りができていたかどうか。生徒の手が上がる時はどんな時か。指導者の声の大きさ、スピードはどうか。字や絵の大きさ、分かりやすさはどうかなど。学生全員が自分の体験として緊張の中でなんとか授業をしたという経験が他の学生の授業をも真剣に見る姿勢を呼び起こしていると考えられます。

### ⑤履修学生へのアンケート集計（後期授業終了時に実施 回収10名中8名 無記名 複数回答可）

2005年12月22日

#### 1. 実習体験について

大変よかった（3人） よかった（4人） 普通（1人）  
辛かった（0人） よくなかった（0人）

\*小学生と交流する機会がなかったのでとても良かったですし、講義だけの授業と違って自分の頭をたくさん使うことができました。とても良い体験をさせて頂き嬉しくおもっています。

\*やはり現場に実際に立つ（実体験をする）ということが大切だと思います。そこから学ぶことがたくさんありました。実際やってみると思いもつかなかったことがたくさんありました。良くなかった点は実習日程がまばらで、少なく、子供たちの定着がなかなか出来なかったことです。

- \*子ども達と仲良くなれた点がよかったです。終わってから子供達と話をすることがなかった点がよくなかった。
- \*子供たちはとっても可愛い。子供は私が好きらしい。
- \*実習の下準備が不十分だった。ビデオを通して流れはなんとなくつかめたけれど、自分は後期からの途中参加だったこともあって、いきなり These, Those 等の高いレベルから教えることになったので、今まで生徒達がゼロからどの様に今のレベルまで上がってきたのか、やっぱり分かりづらい。
- \*自分のことを理解するには役立ったが生徒（小学生）たちにはよく理解させてあげられなかったと思うこと。
- \*やる前はどうかと思ったが、意外にできてよかった。
- \*普通では体験できなかったことができたのが貴重な時間でしたし、子供たちに英語を教えることで自分も成長できた気がする。

## 2. GDM授業法で教えたことは？

大変よかった（2人） よかった（2人） 苦労した（3人）  
 やりがいがあった（4人） 普通（0人） 難しかった（0人）

- \*一つのことがわかったら次に手を挙げてくれる点がよかったです。分からない子に教えるのは難しかった。
- \*生徒達にどの様に教えていくのかを考えられる機会になった事もあるけれど、自分が改めて外国語の英語と向き合った感じだった。新しいことばを習った感じだった。
- \*段階式直接法で最初のところはすごく大事だし、こどもの母語を使わずに英語を理解させるのが難しかった。
- \*繰り返しだけでなく、本当に分かっているかどうかを分かるところ。
- \*常に生徒の立場になって授業案を考えるとということはとても難しかったです。その分GDMは生徒にとってはとても実践的で身になる授業だと思います。
- \*日本語を使わない分子供たちは自分の頭で考える。（受身の授業になりにくい）という点で良いが、逆に日本語を使わないので英語に苦手意識を持ってしまっている子供たちにはとっつきにくかったかもしれない。
- \*子供に This と These の違いなどを教えるに苦労した。
- \*自分が考えていた授業と実際にやった授業は違ったけれども教えることは教えたので苦労はあったけど達成感があったのでよかった。

## 3. 4年生の生徒の授業内容や態度について

よく理解している（1人） 大体理解している（4人）  
 理解している子もいれば出来ていない子もいた（3人） 授業態度はよかった（1人）  
 一生懸命努力してくれた（3人） 楽しかった（5人） 授業態度は少し騒がしかった（0人）  
 あまりよく聞いていなかった（0人）

- \*もう少し実習の機会がもてれば良かったかと思いますが、今回の実習先の子供たちは活気があり、積極的に参加してくれたのですごく助かった面もありました。なにより楽しく出来たことが良かった

たです。

- \*一人一人がしっかりしていてとても聞いていてわかりやすかったです。
- \*いたずらする子はあるのだが、彼らがいるからこそ classroom は活気がある。彼らがいてほしい。そして彼らを勉強が好きにならせたい。
- \*今まで習ってきた英語だけど、全く違う感じがした。とても変わった授業だった。
- \*やはり生徒の理解度に個人差がありますが、すべての生徒が一生懸命に授業に取り組んでいる姿は印象的でした。とてもよく授業に参加してくれましたし、とても楽しく授業が進められました。
- \*すごく積極的で良く助けてくれる。明るくていい生徒たちだと思います。今回の実習は生徒達はすごく良かったです。ただ、私のほうはあまりよくなかったので申し訳ないです。
- \*分かる子はすんなりわかってくれるが分かってくれない子はむずかしかった。
- \*小学4年生ぐらいを落ち着かせることは難しかったけれども興味を持っている子供はちゃんと聞いてくれていたし、積極的に授業に参加してくれていた。

## 【まとめ】

次年度は05年度の反省をふまえ、以下の点についてできるだけ改善したいと考えています。

実習の回数についてはカリキュラムの関係で急増やすことは無理だができるだけ続けて実習ができるような設定をお願いできないか。実習学生については毎回別の二人に替わったので学生、生徒両者ともが相手に慣れるまでに時間がかかり十分に復習をすることができずその雰囲気導入にまで影響を及ぼしていたと考えられる。次年度は二人の内一人だけが交代するようにし、前回から引き続いて教える学生が前半の復習を担当し、生徒自らが進んで発表できる勢いやリズムをつけることができればそのまま良い導入に結びつけていける可能性があるのではないかな。そうすれば授業の流れもスムーズになり、生徒、学生双方の負担が軽減されるのではないかな。また教案作りとしては、生徒が遊ばないで集中し、production や speaking の量を増やす工夫を盛り込むよう学生を指導していく必要があるのではないかな。06年はこれまでの中級を終了した学生のため、上級クラスが設定される予定なので、新たな試みとして継続学習ならではの利点を生かしさらに安定した力を養う授業、継続することで出てくる問題点を回避し、子どもたちがいつも主体的に関われるような授業を考え、実行に移していく必要があるのではないかな。次の年も開かれた視点と暖かい雰囲気のほるみ小学校の先生方に支えられて、真剣に取り組もうとする学生、元気な小学生が英語という言語を通して、さらに豊かなコミュニケーションを育んでいけるように指導し、見守っていくつもりです。（プール学院大学講師）

## 注① Sen-Sit の考え方

新しいセンテンスあるいはセンテンスの要素を学習するのは、それが場面にどのように応用されるかを見ることによる。それが見えるように、センテンスと場面をいっしょに提示することが教えるということだ。「GDM英語教授法の理論と実際」片桐ユズル・吉沢郁生編 松柏社 p.19

# 短大2年次生への読解ワークシートによる指導

此 枝 洋 子

## 1 2005年度の実践概要

筆者は短期大学の英語コミュニケーション学科で学力下位クラスの学生の英語指導をしている。最近数年間は、1年4～11月に週3コマ(90分)の授業でGDMにより *English Through Pictures, Book 1* を用いて文法事項を4技能分野で指導し、12, 1月のリーディングクラスでは、その知識を使いつつ、学生に自力で英語読解ワークシートにより話の内容を読み取る練習をさせている(此枝2005a)。

1年次に同様の指導を受けた2年次生が、昨年度(2004年度)、自分で英語を読み進んで力を伸ばすことを筆者は期待していた。が、実際は、自発的読書活動は一部の学生だけに留まっていた。「学力の低い学生にも自力で読めるもの」を提供する授業内外の環境が十分に整っていなかったことが原因と考えられた。

授業中に2年次生の読解力を段階的に伸ばしてゆけるような教材が与えられれば、彼女たちの読解活動の大きな助けになると考え、2005年度は、前年度使用した教材を既習事項で書き直し、投げ込み教材として使用した。例年どおり、授業1コマ(90分)を3分割し、その第2部分で投げ込み教材等による指導をし、残りの第1部分では速読練習、第3部分でSSR<sup>1</sup>を実施した。

ワークシートを使用した結果、2004年度入学生では、clozeの正解率が使用前より向上し、ワークシートを使用しなかった2003年度入学生の場合(此枝2005b)より高い結果を得た。以下にワークシートとその使用による効果について報告する。

## 2 授業第2部分での活動

2005年度は Brancard, R. & Hind, J. *Ready to Read* の第1～4課のワークシートを作成し授業の第2部分で学生に与えた。後期の第2部分での活動内容は表1のとおりである。

表1：授業第2部分の活動

		具体的内容
第1週	第3課の cloze, 和訳	第3課に入る前に第3課の一部、2箇所を選び cloze を作成。その2箇所の和訳も求め、学生の理解度合いを調べた。
第2週	GDMで“how to~” “be afraid of ~”	未習項目を GDM で導入し使用練習
第3週	GDMで passive	未習項目を GDM で導入し使用練習
第4週	GDMで“tried to ~”	未習項目を GDM で導入し使用練習
第5週	ワークシート	全7枚中1～4枚目
第6週	ワークシート	全7枚中5～7枚目
第7週	第3課 cloze	第1週の cloze と同じ問題
第8週	第4課の cloze	大問2つのうち、1問目は昨年度と同じ
第9週	ワークシート1～3	全12枚中1～3枚目
第10週	ワークシート4～8	全12枚のうち5枚
第11週	GDM “cause” ワークシート9～12	“cause”の導入と練習の後でワークシート。この日は SSR なし

第12週	第4課 cloze	第8週と同じ問題
第13週	読書調査 アンケート	英語読書, 日本語読書について調査
第14週	supplementary reading	Ready to Read の巻末読み物と問いをそのまま使用
第15週	G-TELP <sup>1</sup>	国際英検。担当学生は Level 4 を受験

2004年度との比較のために、第4課の内容を扱った第8～12週について見ることにする。市販テキスト *Ready to Read* の第4課はほとんどが既習事項で書かれているが、いくつかの新出語彙と“cause”の知識が学生にとって未習であった。そのため、“cause”については第11週にGDMにより文法事項の導入から練習をした。また、第4課のテキスト部分を12のワークシートに分け、新出語彙は使用ページに、絵を多用してその説明を付けた。問いは英語の話を丁寧に読めば必ず答えられる内容とした。学生は1枚ずつワークシートに取り組み、答え終わると筆者の点検を受けた。正しく理解できていない箇所については、筆者が必要に応じて口頭で説明をした。

### 3 ワークシート

学生が自分で英語を読み内容を理解する助けとなるように、ワークシートを作成した。話が既習文法事項で書かれ、未習語彙の既習語彙による説明が加わり、さらに、学生が具体的なイメージを描きながら読めるよう写真や絵を多く入れた。それらの写真や絵で語と指示物が結びつき、英語が理解し易くなることを期待した。例えば、*Ready to Read* では“Dennis Trone”の写真を提示し、“Dennis Trone is the captain of a river boat. The Julia Belle Swain is the name of the boat …”となっており、その写真が“Dennis Trone”であるとは書かれていない。しかしながら、ワークシートでは、“This is Dennis Trone. He is the captain of a river steamboat. The Julia (以下同様) …”のように、写真を英語理解の直接の流れの中に取り込んだ。また、The Julia Belle Swain については、この箇所を学生が読む時に、教室前部の黒板にA3サイズの写真を貼り、学生の理解の助けとなるようにした。

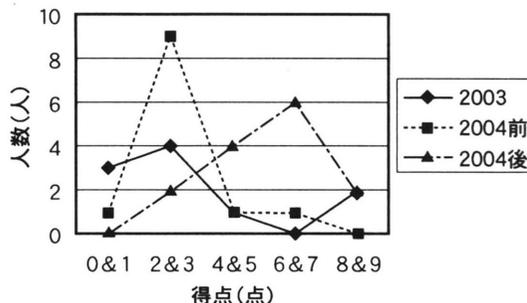
さらに、*Ready to Read* では英文テキスト箇所とは別のページにある船の絵2枚を、ワークシートでは同ページに載せ、絵を見ながら話を読み進めるようにした。また、このパラグラフの冒頭に“*These are the pictures of the Julia Belle Swain.*”という文を加えた。このような変更により、その後続く船の構造と動く仕組みの話が理解し易くなるようにした。また、問いでは、絵の中に“smoke”や“steam”の動きを書き込ませて、英文の内容をより具体的に理解できるよう配慮した。1, 2枚目のワークシートは資料1を参照。

### 4 clozeとその実施結果

cloze を第4課のワークシート取組み（以下、単に取組み）前後に実施した。cloze は大問2つの構成とし、最初の一問は比較のため昨年度と同じものとした。cloze は資料2参照。

今年度担当の2004年度入学生17名のうち、取組み前後共に cloze に答えた学生は15名であった。取組み前には正解率（平均）は32.4%であったが、実施後は

得点分布グラフ



62.0%で、29.6%上昇した。2003年度入学生では37.8%で、本年度のワークシート使用後はそれよりも24.2%高く、ワークシート使用の効果が見られる。

以下の得点分布グラフでは、縦軸は人数、横軸は点数である。9問中9問正解であった場合を9点とし、2点刻みで人数をグラフ上に示した。例えば、「0 & 1」では0点または1点取得学生の合計数が縦軸目盛りで読める。

2003、2004は入学年度、前後は取組み前後である。2003年度入学生では高得点2名と他の8名とで2つの山ができたが、2004年度入学生では山は一つで、取組み後は最多値が高得点の方向に移動した。

平均点や得点分布状況から2004年度入学生へのワークシートによる指導は学生の理解を増すのに貢献したと言える。

## 5 ワークシート実施の際の学生の様子

ワークシートに取り組んでいる学生の観察と13週に実施したアンケート（無記名）結果から次のことがわかった。アンケートは資料3を参照。

### (1) 読むことについて

担当の学生たちの9割が「読む」ことを嫌っている。プリントには仕方なく取り組むが、時には、「今日は読まんどこー」と言って途中でプリントの取組みをやめる学生もあり、筆者は彼女たちを説き伏せることから始めねばならなかった。自力で丁寧に読ませるために、ワークシートは1枚ずつ与え、回答を終えた学生のシートを筆者がその場で点検した。一人一人に対応することで、学生が自分で読まねばならない状況を作り出した。

アンケートで「プリントの読み物を読む気にならない時があったか」の問いに「全くなかった」と答えた学生はいなかった。この問いの回答を平均すると4.1であった。「その時にどうしていたか」には「ゆっくりやった、ぼんやりしていた、窓の外を見ていた」などの答えがあった。感想欄では、「読む頻度を半分くらいにしてほしい」というものもあり、「読む」行為に慣れていない学生の姿が明らかになった。

### (2) 読んでいる時

読む時に、ワークシートを全体として眺めている学生がいた。最初から1語ずつ、1文ずつ読むことをしていない。その様子は、丁度、写真が多い雑誌を眺めるようで<sup>3</sup>、目に付いたところから見ているようであった。そのため、代名詞を理解し損ねることがあった<sup>4</sup>。

読書が好きな2学生は日本人作家の話題の書をよく読んでいたが、他の学生の愛読書は雑誌であった。雑誌は写真が多い。雑誌のみの愛読者は写真には目が行くが、文字を読むのを嫌う。「文字が小さい」と文句を言う。これも読書に慣れていないためであろう。

別の問いで英語の本の読書について尋ねた。彼女たちが理解し易かったものは「絵や写真がある」73.3%、「好きな分野の話」26.7%、「身近な話」13.4%、理解し難いものは「絵がない。字ばかり」60%、「関心がない分野」33.3%の回答であった。これらから、絵、写真が彼女たちの読書を大きく助けていることがわかる。

### (3) 英語読書について

「英語で読む」ことを楽しめたかどうかの問いには、3.5で、「どちらかと言うとまあ楽しめたかな？」くらいだろう。感想としては「英語の力がついたと思う、英語を速く読めるようになった、いろいろ読めてよかった」などの肯定的なもの他、「読む量を減らして欲しい」というものもあった。

#### 4 G-TELP受験結果

2年間に実施した4回のG-TELPテストの全てを受験した担当学生は15名であった。セクションごとの平均点推移を表2に示す。

表2：2004年度入学生のセクションごとの平均点推移 (N=15)

	入学時	1年次最後	卒業時
grammar & vocabulary	62.0	61.0	74.0
reading	40.0	40.7	50.3
listening	36.7	41.0	53.0

入学時に3セクションのうち grammar & vocabulary が最も高く、その傾向は卒業時まで変わらない。入学時と比べ、卒業時には grammar & vocabulary で12点、reading で10.3点、listening で16.3点の得点の伸びが見られる。

G-TELP は3セクションのうち、全てのセクションで75%以上の得点を得ると mastery, 2セクションで得ると near mastery となり、筆者の学科では near mastery を得た学生には一つ上のレベルを次回から受験させている。担当学生のうちで2名が2年最後に near mastery を得た。他の学生(13名)では grammar & vocabulary で75%獲得者は7名である。listening, readingのセクションでは75%以上の獲得者は0名であるが、50%以上の学生は listening で8名(入学時は5名)、reading では9名(入学時は4名)で、少しずつではあるが確実に力がついてきていると言える。

#### 5 まとめと結論

「読む」ことが嫌いな学生が多いクラスで、学生自身が読めるプリントを提供し、読む活動を続けてきた。「嫌だ」と思いつつも、学生たちは一応、読む活動に参加してきた。その結果、cloze 正解率向上とG-TELP成績から、彼女たちの英語力が向上していることがわかる。

学生の読み物に関しては、学生は絵、写真付きの読み物を好んでいる。文字テキストに絵、写真をうまく取り入れた読み物を、今後も提供してゆくことが求められていると言えよう。今年度作成したワークシートもその内容をさらに改善してゆく必要がある。

ワークシートと SSR とをやる気がしなかった学生たちも、取組みを通し自分に克つ経験をし、人間的な部分で成長があったものと期待する。その間に少しずつ英語に触れて読書に慣れることにより、彼女たちの英語力も向上したと考える。今年度、ワークシートの分量を減らして欲しいという意見が1名から出されたが、今後は、提供する読み物の分量を学生の反応により調整してゆく必要があるかもしれない。  
(梅花女子大学短期大学部教授)

#### 注

- 1 SSR=Sustained Silent Reading 各自が自分で黙って本を読む活動。
- 2 G-TELP=General Test of Proficiency 国際英検。担当学生は学力が低いためにTOEICでは英語力の伸びを測る事が難しい。しかしながら、G-TELPはレベル別になっており、レベル4を受験することで担当学生の学力を測る事ができる。
- 3 アンケートで日本語読書の本のタイトルや雑誌名を尋ねた。本では「生協の白石さん」「五体不満足」などをあげた学生がごく少数。他の多数学生はファッション雑誌のような若い女性を対象にし

た写真中心の雑誌名を答えた。

4 別のワークシートに取り組んでいる時にこのことに気付いた。話の最初の部分の内容を絵にする時に、その後の箇所ですべて登場する人物を絵の中に既に描いている学生がいた。そのような絵を描いた理由の説明を求めたところ、彼女が前から順に読んでいるのではないという事実が明らかになった。

## 参考文献

Brancard, R. & Hind, J. 1989. *Ready to Read*. OUP.

此枝洋子 2000. 梅花短大英語科生のためのより良いリーディングクラスを求めて 梅花短期大学研究紀要 48. 43-56.

此枝洋子 2002. 読めたら楽しい *GDM News Bulletin* 54. 21-26.

此枝洋子 2003. 英語教師のための「わかる, できる」授業からの出発 燃焼社

此枝洋子 2005a. 「やり直し英語」クラスの学生へのリーディング指導 梅花女子大学短期大学部研究紀要 53. 27-34.

此枝洋子 2005b. GDM二年目学習者への多読指導 *GDM News Bulletin* 57. 22-30.

此枝洋子 2006. 手作り補助プリントで学生の読解を助ける指導 梅花女子大学短期大学部研究紀要 54. 49-57.

Nuttall, C. 1982. *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*. Heinemann International, London.

Richards, I.A. & Gibson, C. 1975. *English Through Pictures Book 1*. 洋販

資料1 ワークシート 1ページ目, 2ページ目

資料2 cloze

語群から最適なものを選んで ( ) に一語ずつ入れ、話を完成させましょう。同じ語が2回以上使われることもあります。大文字と小文字は使われ方に応じて変えて書き入れてください。(斜字体は正解)

A.

Dennis Trone is the captain of a river steamboat. The Julia Belle Swain is the (1 *name* ) of the boat. It's not an old boat, but it looks (2 *like* ) an old boat. It looks (3 *like* ) a boat from 100 years ago.

The Julia Belle Swain has a large paddlewheel at its (4 *back* ). It turns around and around and pushes the boat (5 *through* ) the water. A (6 *steam* ) engine turns the paddlewheel. In old boats, (7 *wood* ) or coal powered the engine, but today the boat burns (8 *oil* ). In front of the boat are two tall smokestacks. (9 *Smoke* ) from the burning oil goes out these smokestacks. The oil heats (10 *water* ), and the water changes to (11 *steam* ). The steam moves the paddlewheel. This paddlewheel moves the boat down the river.

語群 boat, back, like, name, smoke, steam, water, wood, oil, through, together, river, music
--------------------------------------------------------------------------------------------

資料3：アンケート

読書調査 次の問いに答えてください。

- 1 今年読んだ本、雑誌（英語以外）は
  - ① 0～2冊、      ② 3～5冊      ③ 6～8冊      ④ 9～11冊
  - ⑤ 12冊以上（具体的に冊数を書いてください      冊）
- 2 上で答えた冊数のうち、雑誌を含まない場合の冊数は（      ）冊
- 3 どんな本を読みましたか。本のタイトル、雑誌の名前を書いてください。
- 4 印象に残っている話の内容を書いてください。
- 5 日本語で本を読む（読書をする）のは
  - ① 大好き、      ② どちらかというが好き、      ③ 好きとも嫌いとも言えない
  - ④ どちらかと言うと嫌い、      ⑤ 大嫌い
- 6 日本語で読む本は（あれば選び、なければ⑦に書いてください）
  - ① 字が少なくて絵や写真が多いものを選ぶ
  - ② 趣味にあったものを選ぶ（趣味は？      ）
  - ③ 古本ショップを利用する
  - ④ ベストセラーや話題になっている本を選ぶ
  - ⑤～⑥ 省略
  - ⑦ その他（      ）

（以下、あてはまる所に○を付けて下さい）

	しばしば あった	どちらかという とあった	どちらとも 言えない	どちらかという となかった	全く なかった
--	-------------	-----------------	---------------	------------------	------------

- |                                      |         |         |         |         |         |
|--------------------------------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 7 授業中に読んだプリントの読み<br>物を読む気にならない時が     | 5       | 4       | 3       | 2       | 1       |
|                                      | •-----• | •-----• | •-----• | •-----• | •-----• |
| 8 授業の最後の英語の本を読む<br>時間に、本を読む気にならないことが | 5       | 4       | 3       | 2       | 1       |
|                                      | •-----• | •-----• | •-----• | •-----• | •-----• |

- 9 本を読む気にならない時にどうしましたか（書いてください）
- 10 英語の本では、どんなものが理解し易かったですか。当てはまるものがあれば○を、なければ書きましょう。
  - ① 好きな分野の話（どんな分野ですか？      ）
  - ② 絵があった
  - ③ その他（書いてください      ）
- 11 理解しにくかったのは？
  - ① 興味の持てない分野の話だった（どんな分野ですか）
  - ② 絵がない。字ばかり。
  - ③ その他（書いてください      ）

（以下、あてはまる所に○を付けて下さい）

	楽しめた	どちらかという と楽しめた	どちらとも 言えない	どちらかという と楽しめなかった	全く 楽しめなかった
--	------	------------------	---------------	---------------------	---------------

- |               |         |         |         |         |         |
|---------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 12 「英語で読む」ことを | 5       | 4       | 3       | 2       | 1       |
|               | •-----• | •-----• | •-----• | •-----• | •-----• |

13 12のように答えた理由はどんなことですか。書いてください。

（以下2問省略）

No. \_\_\_\_\_ Name \_\_\_\_\_

## The Julia Belle Swain and Her Captain

Read and answer questions on the sheet.

# 1

(下線のある語には、英文パラグラフの後に説明があります。)

This is Dennis Trone. He is the captain of a river steamboat. The Julia Belle Swain is the name of the boat. It's not an old boat, but it looks like an old boat. It looks like a boat from 100 years ago.



### <Words>

captain: a head of workers on a ship

steam: This is steam.



### <Questions>

A. Put English words on \_\_\_\_\_.

1. Dennis Trone is \_\_\_\_\_.

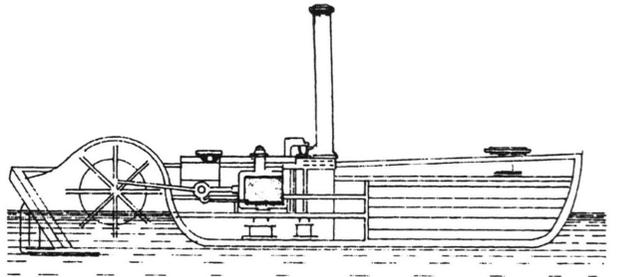
2. The Julia Belle Swain is \_\_\_\_\_.

B. Answer the question.

Is The Julia Belle Swain an old boat?

# 2

(下線のある語には、英文パラグラフの後に説明があります。)



These are the pictures of The Julia Belle Swain. The Julia Belle Swain has a large paddlewheel at its back. It turns around and around and pushes the boat through the water. A steam engine turns the paddlewheel. In old boats, wood or coal powered the engine, but today the boat burns oil. In front of the boat are two tall smokestacks. Smoke from the burning oil goes out these smokestacks. The oil heats water, and the water changes to steam. The steam moves the paddlewheel. The paddlewheel moves the boat down the river.

<Words>

Paddlewheel: This is a paddlewheel.

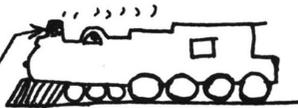


turn around:

She is turning around.



engine: This is the engine of a train.  
It has a steam engine.



smokestack: This is a smokestack.

<Question> このページの右上の絵の中に、The Julia Belle Swain が動く仕組みを日本語で記入しましょう。→で何がどうするのかを書きましょう。

## Basic English 再再認識

相 沢 佳 子

Basic English (以下BEと略)はGDMの言語材料であるだけでなく、教え方の原理そのものの由来にもなっている。GDMの基本原理の1つ grading にしても、その元はBEにある。Ogden は *Basic English* (p80) の中でも次のように述べて順序付けを強調している。Any systematic method of teaching a language must grade its lessons in some ordered manner, so that the simplest and most concrete requirements are mastered first, forming in turn a basis for the more difficult words and structures.

また *English through Pictures* (以下EPと略)で、形容詞始め多くの語や文自体も「対」にして提示され、分かりやすく覚えやすくなっている。Ogden 自身 *Opposition* という本を書いたように、この「対」という考えに深い関心を持ち、BEの学習面に取り入れている。さらに絵を使うことは、多くの意味が視覚的メタファーで表せるなど BE の性格上 Ogden も考えていた。Neurath の考案した Isotype という絵文字を利用してBEの教材を作りたいかったが、結局 Neurath が *Basic by Isotype* を書き、Ogden は注で picture-teaching の説明をしている。*Basic Picture Talks* も語の違いを際立て、語のつながりをはっきりさせるためといって作られている。

このようにGDMの大元にあるBEについては、75年も前によく考え出されたと感心すること点が多い。そのすばらしさについて、改めて感じたことを、個人的なことながら少し記したい。

以前に話したと思うが、私の「基本動詞+名詞」の研究(開拓社『英語基本動詞の豊かな世界』参考)もきっかけはBEだった。BEでは多くの一般動詞の代わりに go up, take away

など「基本動詞+前置詞、副詞」や give a cry とか make a discovery などの「基本動詞+名詞」の用法が頻繁に用いられる。前者は句動詞としてよく知られているが、後者は余りなじみなく、普通英語での使用については疑問を感じていた。そこで実際に小説、学術書、新聞雑誌など読む英文すべての中でこの用法をチェックして収集したのが始まりである。その結果、予想以上に頻繁に使われていた。たまたま当時コンピューター処理による莫大な量の英文資料、コーパスの分析からも同じような結果が出て、イギリス人の専門家たちも驚いていた。

この事実は何を意味するだろうか。確かに Jespersen など英語学者もこの用法について論じている。しかしまだ実証的研究などはなく、ごく最近まで英語学関係でもこの用法はほとんど省みられていなかった。英語の難点の1つである動詞をBEでは名詞の形でこのように使い、難点を克服した。これによりBEで画期的な動詞削除が可能となったのはすばらしい先見の明と言える。この事実からだけでも、Ogden そして BE のすばらしさに敬服する。

さてこのBEについて、一般の人々はどう感じているのだろうか。昨秋のBE全国大会でも話したことを2件、一つはその直前に頼まれたBEについての講演の反応が予想外に大きかったこと。活発な質疑もあり、後からも異口同音に「目からウロコ」ということばでBEのすばらしさを述べ、もっと早くに知りたかったという声が聞かれた(聞き手は英文科卒の中高年者)。やはりBEは英語関係者にもあまり知られていない、が実体を知れば、そのすばらしさに気づくと改めて知った。

もう一つは2003年のBE研究紀要に書いた私の小論「BEの動詞制限について」への反応である。詳しくは紀要をお読み頂きたいが、これはEP 1,2 に出てくる動詞を他の言語の through Pictures シリーズと比較したものである。EPと同じ主旨で Richards 主導で作れたフランス、ドイツ、スペイン、イタリア、ロ

シア語などの教材である。もちろん動詞も出来るだけ少なくと努めたが、これらでは Book 1, 2で動詞は70から90ほどになっている（ただしドイツ語は英語と同じゲルマン語の系列に属しているので複合動詞も多く、動詞は25ほど）。BE は現代英語の分析性という性質を利用して動詞排除が出来わずかな語彙で表現が可能だと言われてきたが、この小論はそれを実証したものである。

実はこの小論を、何人かの大学の英語教師に見せたところ、「英語ってこんな性質があったのか」という大きな反応があり、これはむしろ驚きだった。BE, GDM関係の者にとって当たり前と思っていたことが、一般には英語の専門の人々にさえ余り意識されていないようだ。確かに英語は分析的言語であると学ぶ、がその英語の特性と実際に動詞が分解的にも表現できるという事実とは結びつかないらしい。

またその小論でも触れたが、中国語は言語類型学の面からは英語以上に分析的言語である。しかしEPと同じような中国語を考えると、英

語よりずっと多い動詞が必要となる。確かにある程度分解的というか複合的な表現はある。中国語では動詞が方向補語として結びつく、例えば go outは「出去」、take out は「取出」、come back は「回来」のように。また「基本動詞+名詞」の用法も英語よりはるかに少ない。さらに put など英語では広く使える基本的動詞に対応する中国語はいくつもあり、それぞれの場面で異なった動詞を使う。つまり分析的という一つの特徴だけでなく、英語の基本動詞の意味範囲の広さなどさまざまな特性が BE を可能にしている。

いずれにしてもこれらの例から、BE のすばらしさ、また Ogden の偉大さを再再認識した。そして BE や GDM を学んでいる私たちは、一般の人々が余り知らないこのような宝物を有効に活用し、また他の人たちにも広めたいものと改めて感じた。また魅力あるBEであるために、修正（例えば International words を時代に合うように差し替える）なども検討する価値があるかもしれない。

## ETP の構造と Basic English の記号体系

後 藤 寛

### 0. 序

本稿は半世紀以上まえアメリカで発刊され優れた英語教本（英語独習書）として広く全世界で使用され今日なお版を重ねつづけている、知る人ぞ知る幻の名著 Richards, I.A. & Gibson, C.M. (1945) *English Through Pictures* (以下ETPと記す)の「隠れた構造」について論ずるものである。この書の成立の背景には1929年に英国の C.K.Ogden が「発見」した Basic English の体系（一種の記号体系と考えたい）があるので、本稿はこの Basic English (以下これを Ogdenese と表記する)との絡みで説くこととなる。手元にこの ETP の Washington Square Press 版 (1968) があるが、便宜上ここではYohan

Publications Inc.版の Books I-III (初版は1975) を用いて考える。本稿で扱うような大きなテーマは微に入り細に入る論旨の展開が必要なのであるが紙面にきわめて制限があるためここではそのサワリの部分のみの扱いとなる。

### 1. 構造主義 (Structuralism) と ETP

まず ETP の成立年代 (20世紀半ば) に注目するとこの時代は思想的にも言語理論的にもいわゆる西欧世界で構造主義 (Structuralism) が展開してきたことと一致する。構造主義は広く1つの社会思想でもあり、たとえば芸術における絵画の手法などに見られる視点 (Point of view) の置き方・置かれ方の絡む遠近法 (Perspective) という幾何学的な形態・構造

とも結びつくが、これに関しては後述する。言語思想としての構造主義はスイスのジュネーブ大学で言語学を教えていたソシュール (Ferdinand de Saussure) の死後3年後に、その教え子たちによって講義録として発刊された『一般言語学講義』 (*Cours de linguistique generale*, (1916)) に端を発することはよく知られている。ただし、ここで重要な点がある。それは C. K. Ogden, I. A. Richards のいずれもいわゆるソシュール風の言語理論に賛同しているわけではない。それどころか彼らはソシュール理論には懐疑的なのである。しかしここでは以下特別にすでに10代の始めに音素 (Phoneme) の概念を直感し記号論 (Semiology) の誕生のきっかけをつくっていたソシュールに始まる構造主義のアナロジーとして考えることとする。

構造主義が最も近接に関連する科学は実は数学 (Mathematics) である。構造主義は数学を母体としているということであり、その意味では構造主義の〈構造〉とは数学の構造と同値関係である。数学という科学は特殊 (具体) から一般 (抽象) へと記号化することで構築される一記号体系 (Semiotic system) である。Ogdenese ではなぜあるゆる事実が解き明かされるかは Basic English の850個の語彙がすべて一種の数学的記号 (Mathematical sign) であると考えたとその理由も明解に説明できることになる。すなわち数学という言葉 (Language of mathematics) では用いられる諸々の概念規定 (Conceptual framework) がすべて明確に定まっている。たとえばそもそも「数 (Number)」の概念である自然数、整数、有理数、無理数、実数、虚数はそれぞれ万人に共通な普遍的概念であり、これらの定義は日本語でも英語でも何語で定義されても少しも異なることのないまったく同じ概念であり、厳密に同じ意味として理解されるわけである。その点では自然言語の概念規定は数学のように明確でなく各語のもつ定義域 (Domain) は個人で

異なるがゆえ必然的にその語の概念的意味の値域 (Range) も関数的に異なってくるということになる。ここで自然言語と言ったがこれに対して人工言語として成功をおさめたエスペラント語 (Esperanto) の各語の概念規定はきわめて透明で明確であることは事実であることを特記しておきたい。同時に、半人工的な制御言語 (Controlled language) である Basic English の850語の概念規定もやはり明確なのである。

ソシュールに代表される構造主義が数学を母体とする限りにおいてはその源泉は紀元前のギリシャの数学、それもユークリッド幾何学 (Euclidean geometry) における公理系 (Axiomatic system) にまでさかのぼることになる。幾何学における証明法は補助線を媒介に定理にしたがって未知の事項を既知の事項に還元 (換言) していく一連の操作過程であり、この操作を順次つづけてもうそれ以上は還元できないレベルにたどりついたときその証明は終わりとなるが、このレベルが公理系でありこれは証明なしに真理であるとする天下御免の約束事なのである。ユークリッドの『幾何学原本』で提示された公理の1つに「2点を結ぶ直線はただ1本だけ引ける」というのがあるが、これを真 (True) とせず偽 (False) とすればユークリッド幾何学は根底から崩壊する。これを公理として真であると認めればいわゆる「等式の性質」から数直線上のあり方として数の四則演算 (the Four Operations) も可能となる。この等式 ( $A=B$ ) のもつ4つの性質を次に確認しておく。

$$A = B \Rightarrow \textcircled{1} A + C = B + C \quad \textcircled{2} A - C = B - C \\ \textcircled{3} AC = BC \quad \textcircled{4} A/C = B/C \quad (C \neq 0)$$

これは等式  $A = B$  であれば①～④もすべて真であり、ここから四則演算が成立することを示すものである。すなわち  $A = B$  であれば、①その両辺に同じ  $C$  を加えても等しい、②両辺から同じ  $C$  を引いても等しい、③両辺に同じ  $C$  を掛けても等しい、④両辺を同じ  $C$  ( $C \neq 0$ ) で割

っても等しい，ということでここから演繹的に  
たとえば次のような方程式が解けるのである。

$$2x + 6 = 24$$

↓

$$2x + 6 - 6 = 24 - 6 \text{ (6を移項, ②より)}$$

↓

$$2x = 18$$

↓

$$2x/2 = 18/2 \text{ (両辺を2で割る, ④より)}$$

↓

$$\therefore x = 9$$

数学は記号の科学であり記号 (Sign) を使うことにより個々の複雑な事柄を一般化し簡素化するが，構造主義言語学 (Structural linguistics) ではそれ以前の言語研究で常識であった通時態 (Diachronic) として言語をみるのではなく共時態 (Synchronic) としてとらえ，いわゆる「歴史」を捨象したわけである。その意味では構造主義は歴史を主張するマルクス主義にとって代わった思想である。そして言語を純粹に数学における公理系に相当する意識されることのない抽象的 (イデア的) な記号体系とみるのであり，〈構造〉とは無意識の隠れた構造 (体系) である。ここでの言語記号 (Linguistic sign) とはたとえば道路標識・信号のようなものでもある。記号体系としての数学には隠れた構造の類に入るであろう性質として3つあり，それらは①大小関係，②順序関係，③空間関係であるらしい。そもそも方程式には左辺と右辺という2項 (Binomial) の対立的な見方が常にあるが，この2項対立 (Binomial opposition) の考え方とともに，すでに上で示唆した視点の絡む遠近法 (Perspective) もこれら数学的構造の①～③を組み込んでいるように思える。同時に ETP における構造主義的 (ここでは特別にそのように言っておく) な「隠れた構造」もこの①，②，③，および「2項対立」「遠近法」の5つを一組にしたキー概念で説明できるように思えるが，このあたりとの関わりは節を改め次に触れ

ることとする。

## 2. ETP の主題 (テーマ)

言語音の最少単位である音素 (Phoneme) の発見と文 (Sentence) の直接構成素分析 (Immediate constituent analysis:IC分析) を行ったことが構造主義言語学 (Structural linguistics) の二大業績として知られるが，音素分析もIC分析もそもそもは数学的な2項対立 (Binomial opposition) の原理によるモノ・コトの関係 (モノのコト化) を背景にしたものである。これは C.K.Ogden の *Basic English*850語の語彙体系においてもしかりであり，多くの語が互いに対比概念としてカテゴリー化できるわけで，たとえば大文字表記で記号化した SAME と DIFFERENT はこれを最も象徴する例と言えよう。これらの意味はそれぞれ = と ≠ として記号化しても示すことができ，認知的・知覚的にもきわめて明確となる。この2語によりすべてのモノ・コトは大枠で2分割 (Dichotomy) されるのである。ETP にはこういう数学的な2項対立・2分割の思想が全頁にまたがって終始見え隠れしているのである。そしてこの思想が概念規定を明確にする *Basic English* として見事に融合するように編んである。ユークリッド空間的な題材が ETP でしばしば引き合いに出されるが，その1つが直角三角形の三辺の長さに関するいわゆるピタゴラス (Pythagoras) の定理 (三平方の定理) である。これに関連し「概念の拡張」という観点から1つ触れておきたいことがある。すなわち三角法には余弦定理という有名な定理もあり，これは三角形の二辺の長さとその間の角度がわかれば残りの辺の長さを求めることができるというもので，各々の角に対応する辺の長さと二辺で挟まれた角度の余弦 (Cosine) に関する絶対なる1つの真理である。次の図1で，たとえば辺aについては  $a^2 = b^2 + c^2 - 2bc \times \cos A$  の関係が成り立つのである。

図 1

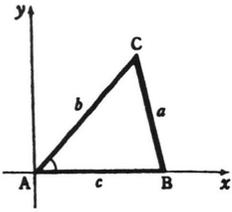
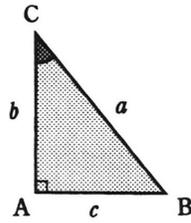


図 2



この余弦定理はピタゴラスの直角三角形に関する定理を一般の三角形に拡張したものであることがわかる。すなわち  $\cos A = 90^\circ$  の場合が  $\cos 90^\circ = 0$  より  $a^2 = b^2 + c^2 - 2bc \times \cos A$  は  $a^2 = b^2 + c^2$  となり、これが  $\angle A = 90^\circ$  のいわゆる直角三角形となる (図 2)。このことより余弦定理はピタゴラスの「三平方の定理」の拡張 (Expansion) であることが明らかになる。換言すれば、一般の三角形を直角三角形に特殊化 (限定化) したものが三平方の定理であり、逆にこの三平方の定理を一般の三角形へ拡張したものが余弦定理だということになる。ここにも具体から抽象へというより高次の記号体系への帰納的概念拡張の例を見ることができ、Basic English (Ogdenese) も 850 個の語彙の織りなす記号体系 (Semiotic system) でありそのネットワークだと言えよう。事柄の特殊な性質を一般化することは記号化することである。この点が重要である。Basic English の 850 語がすべて高次のレベルまで一般化された記号 (Sign) であるがゆえに数学のごとくすべての事象がこれで解けるといふ理屈になる。

歴史的にヨーロッパの知のシステム (Intellectual system) は神による啓示 (Revelation) を真理とみなし聖書や教会の権威を絶対的なものとするか、それともユークリッド幾何学やアリストテレス的論理学を背景にする理性 (Reason) を不変の真理とするかの対立の思想が中世まで支配してきた。ところがこのヨーロッパ的知のシステムもルネサンス期から近代にまたがって事情が少しずつ変わってきたわけである。その理由の 1 つはすでに前節

冒頭で示唆した芸術としての絵画における遠近法 (Perspective) という手法であり、さらにこれが球面幾何学など非ユークリッド幾何学を生み、そしてさらに科学 (Science) の発達とともに近代の射影幾何学、位相幾何学の誕生ともなったわけで、これはモノを見る視点 (Point of view)、すなわち「主体」なるものとの問題と絡んでいる。このあたりはギリシャ時代のユークリッド空間における点 (Point) と線 (Line) の概念、また、「直線外の 1 点を通りその直線に平行な直線は 1 本だけ引くことができる」といういわゆる「平行線公理」として知られる「平行 (Parallel)」という概念とも絡んでいる。絵画手法上の遠近法では二次元の平面に、近いものを大きく遠いものを小さく描くことで三次元の空間を写し取るのであるが、ここでは平行線も交わるのであり、また交わるように描くのが遠近法である。絵画では視点 (主体としての人間) をどこにも、またいくつも置ける (据えつけられる) わけである。知覚的 (Perceptive) にはいわゆるゲシュタルト (Gestalt) 心理学の説くところとも結びつくが現代思想としての構造主義思想、構造主義言語学はこのあたりの考え方を背景に生まれてきたものである。ETP の主題は人間、言語、社会、歴史であるがその〈構造〉は科学的できわめて数学的・幾何学的な構造である。ソシュール (Ferdinand de Saussure) の用語を用いればいわゆるラング (Langue) とパロール (Parole) のうちのラングということになるが言語を抽象的記号体系とみるのである。そして英語という言語の場合その数学的で抽象的な記号体系 (公理・定理) とは他でもなく Basic English 850 語を基本とした語彙体系とその統語上の 7 つの規則そのものであるとすると森羅万象あらゆる事柄が解け Ogdenese となって実現することの説明がつくことになる。

すでに触れたようにヨーロッパ (西欧) 的な知のシステムは人間がこの世の真理を啓示によるものとしてきたか、それとも理性によるもの

としてきたかでありこれはそのまま人間の歴史のなかに位置づけられるが ETP はこれを主題(テーマ)として編まれていると考えてよからうし、同時に古代ギリシャのユークリッド幾何学を母体に近世の絵画手法としての遠近法そして主体としての人間の視点を問題として編纂されている。すなわち近世のルネサンス期における人文主義によりそれ以前の神の視点に立ちモノを見ることから、各々の個性をもつ人間の視点に立ち返り人間を主体とした世界(客体)のとらえ方が自覚されることとなった。これは世界を見る主体が「私(I)」となったことである。各々の主体(私)がそれぞれの視点から客体(モノ)を見ることのできるようになったのが近世の絵画における遠近法であり、これは人間の視点ではなく神の視点に立った中世までの宗教画風とは対比的な絵画手法であった。レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci)に代表される何でもできる能力をもつ万能人が理想的人間とされ、各々の個性をもつ個々の人間(私)がそれぞれの視点から自由に客体を見ることで絵画・彫刻物などの芸術作品が多く生み出されたのである。ETPで提示される最初の文が I am here. であり、これを振り出しに主題が展開されることはこのあたりの事情を象徴するものと言えよう。すなわち、このI(私)という主体からあらゆる客体を見るわけである。ただし、その主体であるI(私)は同じ主体であるI(私)の視点から客体としては見えないように思えるかもしれない。しかし近世の絵画はこの主体(I)そのものも鏡に映る自画像として描くことを可能にしたわけである。この鏡に映る客体の例に関連した題材もETP中にいくつか提示されている。ETPにおけるこういった主題はソーシャル風の構造主義言語学からすればラングとパロールのうちのパロールとして顕現していると解釈できよう。

神の視点に立ち啓示(神話)を真理としてきた中世までの人間は近世のルネサンス期に絵画で人間の視点に立つ遠近法を採り入れ人間とし

ての主体性と理性に目覚めたわけであるが、さらにこれを基盤に近代には数学の分野でフランスのデカルト(Descartes)、数学・物理学の分野でイギリスのニュートン(Newton)、天文学の分野でポーランドのコペルニクス(Copernicus)、イタリアのガリレオ(Galileo)、ドイツのケプラー(Kepler)などが科学の進展をもたらしたのである。そしてその母体はすべて古代ギリシャの数学者ユークリッド(Euclid)による幾何学にあり、幾何学における公理系こそが理性的な真理であるとする考え方から導き出されたものである。この世の真理が啓示によるものか、それとも理性によるものかに関してはドイツの哲学者カント(Kant)の『純粋理性批判』で展開された批判哲学もあることは特別に付け加えておきたいが、いずれにせよETPではユークリッド幾何学をはじめ、すべてこれらの理性的・科学的題材が用いられていて、主題となっているのである。ニュートンはリンゴが木から落ちるのを見て重力の問題に気づき万有引力の法則を導いたし、さらに彼は物体の移動の速度・時間・距離の関係を明らかにする微分・積分の概念を確立したが、これらも理性による偉大な科学的発見であった。

論旨を今一度定めると紀元前のギリシャにおける理性の象徴としてのユークリッド幾何学から、近世の遠近法、さらに近代の科学を基盤に球面空間などを扱う非ユークリッド幾何学が誕生しこれがユークリッド幾何学における公理系の見直しとなった。そしてさらに現代に入りこれが射影幾何学・位相幾何学を生むこととなったが、これは近代までの絵画手法としての遠近法とモノを見る視点(主体)を解体したのであった。このあたりの事情から言語も数学的構造と平行する記号の体系(ラング)であるとみる構造主義思想が台頭し、20世紀半ばからの思想界を支配的なものにしたのである。人間(主体)があつて言語があるのではなく、言語(ロゴス:Logos)があつて人間(主体)があるこ

とになったと言ってよいであろう。さらに言えば、人間（主体）は数学的記号体系として形而上学的に先在するラングをいくつもの視点に立ちそれぞれの遠近法を用いてパロールを実践するのであるということになる。今日の構造主義はポスト構造主義（Post-structuralism）とも呼ばれるが、ETPは20世紀半ばのいわゆる構造主義の時代に誕生したのである。題材としてユダヤ系ドイツ人でアメリカに帰化した物理学者A.Einsteinの科学研究も引き合いに出されている点はETP成立の時代にも則して興味深い。概念を抽象化し数学的公理・定理にたとえられうる秩序ある一記号体系としての言語the Basic English languageもこの構造主義思想の流れの中で誕生したことは事実なのである。

### 3. 結び

本稿では太平洋戦争終焉の直前(1945年7月)に世に出た有名な英語教本であり独習書でもあるアメリカのI.A. Richards and C.M. Gibson著による*English Through Pictures (ETP)*の隠れた<構造>について論じた。このETPには特別にスイスのソシュール(Ferdinand de Saussure)風の構造主義言語学(Structural linguistics)のアナロジ的解釈からすれば、いわゆる言語(ラングージュ: Langage (仏))のラング(the Langue)とパロール(Parole)が示されているとも読める。ここでの<構造>とは意識されない無意識的な言語の抽象的記号システム(Semiotic system)である。そして英語という言語の場合その最も抽象度の高い記号システムが*Basic English (the Ogdenese language)*であるというとならえ方もできる。

この構造主義的な無意識の構造と関連し最後に1つ付け加えておきたいことがある。それはやはり紀元前のギリシャで絵画、建築、彫刻などに採り入れられ代々今日まで使われている線分を分割することに関わる隠れた秩序である。

この線分の秩序ある分割は「黄金比 (the Golden Ratio)」として知られるもので、たとえば長方形であれば縦・横の二辺の比を $2 : (1 + \sqrt{5}) \doteq 5 : 8 = 1 : 1.6$ にすることが最も調和感・美的感のある分割だとするものであるが、これも構造主義でいう隠れた<構造>に近いものでなかろうか。 $\sqrt{5}=2.2360\dots$ は無理数であり黄金比が整数比では表せないところも神秘的であるが、実はETPもこの黄金比の長方形を用いた判(新書サイズ)の書であり、横と縦が見事にほぼ1:1.6の比となっている。同時にC.K.Ogdenの*Basic English*に関する文献の多くがこの黄金比を用いた新書判であるが、このことも本稿で論じた主旨を象徴的に示すものの1つだとしておきたい。

(名古屋市立大学教授)

### 参考文献

- 橋爪大三郎(1988)『はじめての構造主義』講談社  
丸山圭三郎(1981)『ソシュールの思想』岩波書店  
Ogden, C. K. (ed.) (1930)  
“Opposition : Logical, psychological, and orthological” (By Adelyne More) .  
*Psyche*, Vol.10 (1929-30) , Routledge / Thoemmes Press 1995.  
Richards, I.A. & Gibson, C.M. ( 1975)  
*English Through Pictures (Books I-III)* .Yohan Publications, Inc.

## **“Computers” are changing our everyday living.**

**Asada Akie**

Changes in “computers” are going on all the time these days. “Computers” are electric machines for storing knowledge and news, and for sorting them, and in addition for controlling other machines. Men are making better computers which are able to do more work quicker than before. With the coming of better computers our everyday living is changing as well. Let us see some of the changes they made.

“E-mail” - online letter - is taking the place of a letter or a post card with a stamp on it. I am one in the group named “Society for Interpreter Guide”. Every month a newsletter in a paper bag with an eighty-yen stamp on it was sent to everyone in the group. Now by way of online letter all the persons in the group get ideas about what they did this month and what they will do the coming month.

What will you do when you come across things about which you have little knowledge and have desire for more? In the past I went to the library in my town for the books in need. Now the first thing I do is to take a seat in front of the computer in my room and to take a look at pages on the “inter-net” - international network. Through international network I am able to get a great amount of knowledge and ideas and to make my thought stretched out.

From time to time we are happy to have new-comers to our monthly regular meeting. “How did you get knowledge about our meeting?” “I saw your online page on the computer”. More new-comers have their way to our meeting through international network. Computers are playing an important part for our meeting.

Computers have a number of other possible ways of use. Reading newspapers online, booking seats for theaters, taking different sorts of tickets through international network, even doing trade online. Teachers in our GDM group get ideas and pictures for teaching from computer network. A computer is an instrument for teaching English as well. We are exchanging our ideas to one another online. Online page of GDM West Japan Branch has a new face. Come and see our new look: [www.gdm.pos.to](http://www.gdm.pos.to)

(Lecturer, Baika Women’s University)

## 書 評

### Rodney Koeneke, *Empires of the Mind : I. A. Richards and Basic English in China, 1929-1979*

2004年にスタンフォード大学プレスから出版されたこの本は、I・A・リチャーズが中国で行なった教育活動を振り返り、批判的にまとめた伝記である。

Rodney B. Koeneke 博士 (Ph. D) という著者について知る手がかりは殆どないが、本書の序文によるとスタンフォードで英帝国について教えた経験のある歴史学者らしい。名前はドイツ語の“Köneke”を英語風に変えたもので、ドイツ系の米国人かもしれない。

題名にある“empires of the mind” [思考の帝国] というのは、1943年にハーヴァード大学でウィンストン・S・チャーチルが行なった演説からの引用である (Churchill)。ベーシック英語を広めることによって生まれる国際連帯が、搾取のために他国の土地を奪う過去の帝国主義ではなく、善意に基づく思考の帝国だとチャーチルは述べた。

善意に基づくとはいえ、これは一種の言語帝国主義である。そして、C・K・オグデンもこの演説を自著の冒頭で引用し、ベーシックの普及に利用した (Ogden)。

リチャーズが北京の大学で教えることになった背景にも、中国に対する英・米の帝国主義がある。欧米諸国によって植民地化されていく中国を救うために立ち上がった義和団から受けた被害に対して、米国政府が中国から勝ち取った莫大な賠償金の一部を、せめて中国への教育的援助に使おうという目的で、米国留学を予定している学生たちのために設立されたのが清華大学である。ここが中国におけるリチャーズ最初の任地だった (55-56)。

英文学を教えるために招かれたリチャーズだが、トマス・ハーディの『テス』を教えても著者の意図を全く読み取れない、つまり制度や権力への疑問を全く感じないエリート大学生たち

や、試験中に横行する不正行為に驚かされ、基礎教育の重要性を再認識し、オグデンが主宰する研究所の中国支部を設置してベーシックの教材開発に励むことになった (Koeneke 66, 72)。

今回の伝記は、1930年代にリチャーズらが中国で行なったベーシックの普及活動を中心に展開する。ケンブリッジ大学の知識人たちが中国に対して抱いていた幻想を紹介するところから始まり、リチャーズが行なった孟子研究も採り上げつつ、戦局悪化に伴う中国南部への移動、米国への退避、共産党政権になってからの再訪、そして30年後に実現した最後の訪中までを辿る。

西洋知識人の東洋観や文化と帝国主義の関係については、パレスチナ出身の英文学者エドワード・W・サイード [Said] の評論を参考にしつつ、リチャーズの姿勢が一方的な欧州偏重に陥っていない点は評価している。

1950年に中国を再訪したとき、共産党による改革が望ましい形で進行しているのを見て、勝利がどちらの帝国に訪れようとしているのか分かったとリチャーズが手紙に書いたことも紹介されている (189)。これは、チャーチルの説いた思考の帝国論をリチャーズが快く思っていなかったともとれる挿話である。

軍事的な帝国主義に比べれば雲泥の差とも言える善意に満ちた平和主義者としてリチャーズは位置づけられている (Koeneke 17)。それでも、ベーシックへの批判に耳を貸さず、中国の歴史的・社会的問題に対してあまり興味を示さなかったリチャーズの姿勢を、ある種の帝国主義的思考なのではと著者は考える (18-19)。

ただし、この伝記には誤解と思われる箇所もある。

例えば、オグデンとの関係が悪化し、冷戦の

50年代に入ってリチャーズ自身もベーシックへの興味を失っていったと書いてある(209)。実際のところ、中国での体験をもとに、ハーヴァード大学のクリスティン・ギブソンと協力してリチャーズが開発を続けた『絵で見る英語』の第1巻と第2巻はベーシック入門のために最適の教材である(Richards and Gibson, *English Through Pictures*)。

74年に発表したギブソンとの共著の中でリチャーズはベーシックの重要性を再認識するため、5頁にわたってベーシックを使い、ベーシックを解説した(*Techniques in Language Control* 27-32)。さらに、ベーシックだけでは不十分な状況にある米国の学習者を対象にした *Every Man's English* をも提案した。つまり、ベーシックを捨てたわけでもないし、ベーシックへの批判に耳を貸さなかったわけでもないのだ。

ギリシャ古典からリチャーズはホメロスの『イリアッド』とプラトンの国家論をベーシック的な英語に翻訳し、中国での教材として使おうとした。これが西洋思想を東洋人に強要する、一種の文化帝国主義であるかのようにこの伝記では繰り返し書かれている(1, 194)。

しかし本当にそうだろうか。リチャーズが中国で熱心に教えようとしたのは、彼の専門だったサミュエル・テイラー・コールリッジなどの英詩ではないし、ケンブリッジで評判になっていた批評でもない。ホメロスやプラトンは結果的に西洋の古典になったが、実際にこれらの著作が書かれた古代ギリシャと、ルネッサンス以降の欧州のあいだには、中世という千年間の断絶がある。ギリシャ古典を西洋の専有物のように考える必要はないだろう。

『イリアッド』は東洋と西洋の戦争を扱った史上最初の物語と言えるが、どちらかの軍勢を一方的に英雄視したり、対立する側を悪役として描いてはいない(Richards, *The Wrath of Achilles*)。どちら側にとっても悲劇的な物語として展開されるイリアッドは、学生が戦争に

ついて考える教材として悪くない選択といえる。

プラトンの国家論は英語の題名が *Republic*、つまり共和国である。近代以降の国際社会で一般的になった共和国という概念の出発点とも言うべき古典である。近代化が始まったばかりの中国でこの共和国論を教えることまで西洋文化の押しつけであるかのように書く必要もなからう。現に、リチャーズを迎えた中国の知識人たちは西欧マルクス主義に強い関心を持っていた(202)。彼らにプラトンから始めるよう説くのは、哲学史とマルクス主義の関連から見ても、それほど的是はずれなことではなからう。

この伝記の著者は、リチャーズの仕事を一方的に非難することを目的にしているわけではないと前書きの中で述べている。同様に、この書評も一方的な非難を目的としているわけではない。

たとえば孟子の思想をリチャーズが吟味した著作 *Mencius on the Mind* [心理を考察する孟子] を読み、それまで文学や意味の研究を通してリチャーズが考えてきたことの必然的な結果として中国でベーシックを教えることに力を注ぐようになったこと、つまり、決してそれまでの研究を断念して方向転換したわけではないことを、この伝記は明らかにしている(90)。著者がそれを皮肉な展開だと考えている点に同意できるかどうかは置いておくとして、その時期にリチャーズが考えていたことの一部を明らかにしたのは功績と言える。

読んでいて最も印象的だったのは、戦局が悪化し、リチャーズ夫妻が中国を離れたあと、雲南省の昆明に残ってベーシックや上級英語を教え続けた友人たちのことである。爆撃で校舎の一部が壊れたあとも彼らは授業を続けた(176-77)。最終的にわずかな数の英語教員しか養成できず、ロックフェラー財団からの資金提供も打ち切られ、ここで開発された教材や教授法を中国各地へ広めることはできなかった(183)。投資という点から見れば失敗だったことは否定できないが、彼らの努力にどういう意

義があったのか、中国語による調査が望まれるところだ。

リチャーズが中国へ赴くことになった政治的背景や、リチャーズ夫妻の日記を中心に膨大な資料に目を通し、これまであまり知られていなかったリチャーズの中国時代を明らかにした点においても、この伝記は画期的であり、20世紀における東洋と西洋の出会いと変化を知る上で貴重である。飯嶋良太（福島大学助教授）

### 参考資料

Churchill, Winston S. "The Price of Greatness Is Responsibility."

<http://www.winstonchurchill.org/i4a/pages/index.cfm?pageid=424the>

Koeneke, Rodney. *Empires of the Mind: I. A. Richards and Basic English in China, 1929-1979*. Stanford; Stanford UP, 2004.

Ogden, C. K. *The System of Basic English*. 1934. New York: Harcourt, [n. d.]

Richards, I. A. *Mencius on the Mind: Experiments in Multiple Definition*. New York: Harcourt, 1932. Rpt. by Kessinger, ---. *The Republic of Plato: A New Version Founded on Basic English*. New York: Norton, 1942

---. *The Wrath of Achilles: The Iliad of Homer, Shortened and in a New Translation*. New York: Norton, 1950

Richards, I. A., and Christine Gibson. *English Through Pictures*. Book 1. 1975. Tokyo: IBC, 2004

---. *English Through Pictures*, Book 2. Tokyo: Yohan, 1975.

---. *Techniques in Language Control*. Rowley: Newbury, 1974.

Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. 1993. New York: Vintage-Random, 1994.

---. *Orientalism*. 1978. New York: Vintage-Random, 2003.

## 2つのGDMワーク

### 中学生のためのGDMワークシート（吉沢郁生）

吉沢さんのワークは、EPを小学生に教え始めた頃、plan をたてる段階から頼りにしたワークです。中学生にきちんと、くまなく基礎を習得させることを目的につくられていると思います。

コントラストのある単語を入れるだけの問題、例を見ながら考えて文を書く、絵を見てたくさん自由に書くものまで、目先を変えながら、書く力、読む力を伸ばせるように工夫されています。形式は変化に富み、ていねいな絵に導かれながら、ストーリーを楽しみながら、学んだ事を確認できます。後でしっかり音読することを前提に作られている事がわかります。また、中学生の知識として広げたいところは詳しくまとめているように思います。

「わかった」という気持ちで授業を終えるためにも、生徒が迷わない絵と難しすぎないことがとても大切です。一方で、「十分に学んだ」という満足感ももたせる量をこのワークは持っていると思います。

### GDMワークブック 2005（新井等）

発売以来使わせてもらっています。中学生はノートのあと、時々配られるこのコピーをとっても楽しみにしているようです。絵が紙面の半分もあり、必要な単語も書かれているので、負担にはなりません。字の部分をすっかり消して渡し、自由に書かせる時もあります。得意な子にはこれが一番です。

線画を越えた精密な街や乗り物の絵は新鮮ですし、'happy' 'hard' のところなど表情にユーモアがあふれて、とても楽しいです。

恵比寿の成人クラスの生徒さんが購入されて、時々数人の方が早めに集まり答え合わせをされています。習ってから時間が経っても、ほとんど正解できてしまうようです。先日質問されて、「それは今日習うところですよ」とお答

えしました。

Teaching plan の仕上げがワークシート作りですが、まとまらなくて、書いたり消したり、長い時間がかかってしまう場合があります。そんな時、このワークがいかにすぐれているかを思い知る時でもあります。

Book2 には一連のストーリーに teaching points がちりばめられていて、どこで区切るか、どう grading をつけるか、いつも迷ってしまいますが、このワークをはっきりとヒントを与えてくれます。Book2 の最後のページ分まで欲しい!!

加藤准子 (GDM英語教授法研究会会員)

吉沢郁生:

中学生のためのGDMワークシート2002 1300円  
中学生のためのGDMワークシート2003  
(2002のつづき) 1200円

新井等:

GDMワークブック2005 1200円

申込: GDM出版部 Tel/Fax 045-623-0618

E-mail: gdmshuppan@hotmail.com 菅生由紀子  
231-0833 横浜市中区本牧満坂187-55

振替 00120-6-603561 GDM英語教授法研究会

## English Through Television (ETV) の利用を考える

ETVはビデオとDVDのどちらでも手に入れることができます。内容はEPI, p.4~51までの絵と文に音声がついたものと, p.58~112の単語や文を少し広げて作られた11のshort storiesに分かれています。

GDMのクラスで使う場合、live~絵~reading~writingの授業の復習として有効でしょう。特に中高年のクラスは週一回のため、クラスでの発話だけではスピーキングやリスニングが不足しがちです。ETVでは画面が大きな助けとなり、また英語のリズムやイントネー

ションも同時に学ぶことができます。大人のクラスの場合、リスニング力は個人差が大きいので、自習用に個人のペースで復習できる教材として有効利用でき、購入希望される方もいます。

また、Book I の後半を扱った ETV では EP から広げたことばの表現を知る機会にもなり、教材としてはとてもよくできていると思います。クラスの中で ETV で一緒にリピートしたり、dictation をしたり、story telling などをして楽しめるでしょう。それぞれのクラスの様子をみて利用したいものです。

他にGDMのクラスに参加できなくても、EPのみで学ぶ方にはぜひETVという音声教材をお勧めします。音声のみ、リピート用と文字付、テスト用と3部構成になっているので自習には最適です。自立した学習を支える良きパートナーとなることでしょう。

黒瀬るみ (GDM英語教授法研究会会員)

## GDMビデオ

English Through Pictures, Book 1, pp.4-51  
DVD 3150円; VHS 3000円

English Through Television, Based on  
English Through Pictures, Book 1, pp.58-112

DVD (1枚) 4200円; VHS(3巻) 各3000円  
VHS 1, Lessons 13-17 (EP1, 58-81)  
VHS 2, Lessons 18-21 (EP1, 82-100)  
VHS 3, Lessons 22-23 (EP1, 101-112)

Graded Direct Method: 外国語の体験的発見的学習法 (片桐ユズル, 2005年6月18日, すみだ産業会館での公開講演会。GDMとは何かをはじめてのひとに紹介するのに便利です)

DVD or VHS, 3465円

Spanish Through Television(VHS) 3150円  
ビデオはじめてのにほんご(VHS 4巻)12000円

問合せ:

片桐ユズル Tel/Fax: 075-712-1951

E-mail: yuzuru@kyoto-seika.ac.jp

# ◆◆◆東日本支部活動報告◆◆◆

(2004年8月～2005年7月)

## ■2004年

8月14～17日	夏期英語教授法セミナー	YMCA 東山荘	
9月25日	月例会	目黒区立田道住区センター	
	デモ:	EP1, 72, when (conj.)	植田恵子
	トーク:	The drawer has knives, forks and spoons in it. に関連して	安西聖雄
10月30日	BE 研究大会	三田福祉会館	
	トーク:	言語の非習慣的側面	片桐ユズル
	トーク:	語彙意味論とベーシックイングリッシュ	後藤 寛
	デモ:	Let's Have a Talk in Basic English	多羅深雪
11月21日	中上級セミナー	中野サンプラザ	
	月例会 デモ:	EP2 pp.129-131, rate	加藤准子
	トーク:	絵本を使った授業	近藤ゆう子
12月11日	月例会	三田福祉会館	
	デモ:	EP1, 46, before (prep.からconj.へ)	唐木田照代
	トーク:	Book Review: <i>Teachers' Handbook</i> , BK1中心に	猪俣徳枝

## ■2005年

1月8～9日	初級セミナー	三田福祉会館	
1月9日	月例会 デモ:	EP2, 16, send	黒瀬るみ
	トーク:	GDM実践報告 (九州私学大会を含む)	北村紀子
2月11～12日	BE ワークショップ	浜京	
2月11日	月例会 トーク:	Talk about My Journey to an Asian Country	猪俣徳枝
	トーク:	A Word for You (Syota-kun)	菅生由紀子
3月12日	月例会	神奈川県民センター	
	デモ:	授業見学 go (小学生クラス)	大野晴美
	トーク:	発話を正確にする工夫は?	菅生由紀子
4月23日	月例会	田道住区センター	
	デモ:	give	竹内久枝
	トーク:	新しいワークブックの考え方	新井 等
5月28～29日	GDM発音ワークショップ	浜京	
5月29日	月例会 トーク:	Assimilation	中郷安浩
	トーク:	Intonation	伊達民和
6月18日	第48回 GDM英語教授法公開講演会	すみだ産業会館	
	1 講演	外国語の体験的発見的学習法 Grated Direct Method を実感する (英語以外の外国語体験も含む)	片桐ユズル
	2 授業体験	1) はじめての Question 2) see 3) 関係代名詞 which	加藤准子 安西聖雄 竹内久枝
7月23日	月例会/総会	田道住区センター	
	デモ:	EP2, 34-43, support, enough を中心に	多羅深雪

## GOTENBA SUMMER 2005



Matsuura-san and Fukada-san



Yoshizawa-san teaching

## KYOTO SPRING 2005



Ryota-san and Yoko-san



Everybody talking

## ◆◆◆西日本支部活動報告◆◆◆

(2004年9月～2005年8月)

### ■2004年

9月19日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター スピーチ・クリニック (発音トレーニング)	
	読書会:	Richards, I. A. & Gibson, C. <i>Learning Basic English</i>	
	デモ:	may (EP2, 63)	此枝洋子
10月23日	弁天町オーク・オートム・ギャザリング	"Talk in Basic English"	
10月30日	ベーシック研究大会との共催	大阪市立弁天町市民学習センター 1日体験教室「おもしろ英語教室」 東京・港区・三田福祉会館	

11月23日	初級セミナー	大阪市立総合生涯学習センター	
12月18日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター 発音トレーニング	
	読書会：	Richards, I. A. & Gibson, C., <i>Learning Basic English</i>	
	デモ：	more (EP2, 67) “Talk in Basic English”	松川和子
<b>■2005年</b>			
1月30日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター 発音トレーニング	
	読書会：	Richards, I. A. & Gibson, C., <i>Learning Basic English</i>	
	デモ：	before/after (EP1, 46) “Talk in Basic English”	河村有里子
2月26日	月例会	大阪市立弁天町市民学習センター 発音トレーニング	
	読書会：	Richards, I. A. & Gibson, C., <i>Learning Basic English</i>	
	デモ：	get (EP1, 71) “Talk in Basic English”	田附則子
3月5日	弁天町春のセンター祭り	大阪市立弁天町市民学習センター	
3月26～27日	スプリングセミナー・月例会 トーク：	1日体験教室「おもしろ英語教室」 ザ・パレスサイドホテル（京都） トロント・シュタイナー学校教師養成1年集中 コース	福本ひろ 新井 等
	デモ：	straight, bent, better, attempt (EP2, 38-39)	
4月24日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター 発音トレーニング	
	読書会：	Richards, I. A. & Gibson, C., <i>Learning Basic English</i>	
	デモ：	change (EP2, 69) “Talk in Basic English”	麻田暁枝
5月29日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター 発音トレーニング	
	読書会：	Richards, I. A. & Gibson, C., <i>Learning Basic English</i>	
	デモ：	if (EP2, 82) “Talk in Basic English”	此枝洋子
6月25日	教授法公開セミナー	大阪市立総合生涯学習センター	
		I. GDMによる授業づくり (1) 基本的な考え方 (2) ビデオによる授業検討 『目の前のことから間接疑問文を無理なく理解させる』 授業者: 松浦克巳 コメントーター: 吉沢郁生	吉沢郁生
		II. 体験授業: 1. here there 「はじめてのセン テンス」 2. take 「3時制を教える」 3. which 「疑問詞から関係詞へ」	麻田暁枝 田附則子 石井恵子

7月17日

月例会

大阪市立総合生涯学習センター

発音トレーニング (スピーチ・クリニック)

読書会:

Richards, I. A. & Gibson, C., *Learning Basic English*

デモ:

which (EP1, 48)

松川和子

西日本支部総会

## ■□ 編集後記 ■□

GDMは気がついてみたら、こんな大木に成長していました! 今回の特集は意図して実践報告を集めたのではなくて、箱舟に積みきれないほど、集まってきたのです。それに特集という名前をつけただけです。わたしたちはGDMをもっとひろげたいと、もどかしい思いをもちつづけながら、自分にできることをしてきました。その結果、小学校から中学・高校、大学・短大、社会人から高齢者にいたるまで、あらゆるレベルでの実践が根をおろしています。ねがわくは会員のみなさん、このブレティンをできるだけ多くのひとにばらまいてください。またユズルのGDM紹介ビデオもはじめてのひとには手っ取り早い説明になりますし、りくつの好きなひとにはリチャーズ意味論の再評価をおすすめしてください。

片桐ユズル (4/30/06)

### ユズルのリチャーズ意味論 3 部作 (限定10部)

#### 1. 『意味の意味』

見てわかる意味論の基礎とBASIC English (京都修学社, 2002年, 初版)

#### 2. 『実践批評』の意味の4分法: ものそのものと向かいあう英語入門期の指導

--言語の指示的用法から教える (京都精華大学紀要, 第28号, 2005年3月)

#### 3. BASICを使いこなす

EPのメタ言語: 語彙力の強め方 (GDM News Bulletin, No. 55, June 2003)

特価: 2100円 荷造・送料: 400円 (郵便振替 01000-3-12379 片桐ユズル研究室)

申込・問合せは Tel/Fax: 075-712-2951 E-mail: yuzuru@kyoto-seika.ac.jp

〒603-8035 京都市北区上賀茂朝露ヶ原町16 フォルム上賀茂202 片桐ユズル